

なんじょう歴史文化保存継承事業 年報



「ガジュマル 百名小学校」1952年 撮影・提供 太宰好夫
氏（「沖縄戦体験の証言（玉城地域）」）

2023年度
南城市教育委員会

発刊にあたって

『なんじょう歴史文化保存継承事業 年報』を発刊するにあたり、ごあいさつを申し上げます。

本書では、南城市の「なんじょう歴史文化保存継承事業」（以下、本事業）の取り組みについて紹介するとともに、本市の文化・歴史について市民の皆様をはじめ、広く内外に知っていただきたいと思い、この度冊子の発刊に至りました。

本事業は、本市の文化・歴史について、市民の皆様から直接聞き取り調査を行ったり、文献資料や映像など資料の調査、地域に直接赴いて行う現地調査を行い、各専門家とともに検証し、取りまとめて発表し、市民に普及・継承していくことを目的に行っています。

本市では、2020年（令和2）に『南城市の沖縄戦 資料編』、2021年（令和3）に『南城市の沖縄戦 証言編・大里-』を刊行しました。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響を受けたことで、2006年（平成18）の南城市誕生以前に証言がまとめられていなかった大里地域を優先して刊行しました。そのため、それ以外の地域の方々の証言が未発表のままとなっていました。そこで、年報の刊行にあたり、他地域の証言を順次発表していきたいと考えております。

また、本事業では、写真展（9月開催）、講演会（9月開催）、民話劇（11月、2024年1月開催）など、市民の皆様の本事業で知りえた内容を共有していただくための取り組みも行っています。

写真展は、2つのテーマで時期を分けて開催しました。前半は、当教育委員会が実施しているウェブサイト「なんじょうデジタルアーカイブ」のなかから厳選した地域の古写真を展示しました。後半は、NPO法人 琉米歴史研究会と共催し、戦前から戦後にかけて南城市を含む県内各地の風景や人々の暮らしを撮影した写真を展示しました。

講演会は、赤嶺政信氏（琉球大学名誉教授）を講師に迎え、赤嶺氏が長年にわたり調査・研究をしている久高島の歴史と文化についてお話しいただきました。

民話劇は、当教育委員会が刊行した『民話編』の中から民話を題材に、劇を創作し、市内の小学校で公演しました。

本書が、いわば「創刊号」となります。多くの皆様が本書を通じ、南城市の歴史・文化の一端に触れるきっかけとなりますように祈念し、発刊のごあいさつといたします。

2024年（令和6）3月5日
南城市教育委員会

目次

発刊にあたって

なんじょう歴史文化発信事業について……………	1
沖縄戦体験の証言(玉城地域)……………	2
新垣 世治(玉城・百名／一般疎開)……………	3
稲福 良子(玉城・玉城／学童疎開)……………	6
大城 勲(玉城・前川／村内避難)……………	9
大城 清子(玉城・仲村渠／やんばる疎開)……………	13
大城 隆(玉城・當山／一般疎開)……………	17
神谷 依信(玉城・仲村渠／学徒隊)……………	18
川平 チヨ(玉城・愛地／学童疎開)……………	28
喜舎場 清三(玉城・琉球ゴルフ倶楽部内／義勇隊)……………	30
……………	……………
座波 次雄(玉城・百名／村内避難)……………	38
……………	……………
平良 新盛(玉城・垣花／学童疎開)……………	57
知念 信夫(玉城・糸数／学童疎開)……………	60
……………	……………
中村 秀雄(玉城・前川／義勇隊)……………	76
前川 守幸(玉城・愛地／南部避難)……………	81
前原 静子(玉城・玉城／村内避難)……………	83
証言に出てくる主な用語集……………	89
「沖縄戦体験の証言」(玉城地域)の原稿化作業を終えて……………	94
写真展……………	95
講演会……………	96
民話劇……………	97

なんじょう歴史文化保存継承事業について

本事業は、南城市の歴史・文化について調査研究を行い、冊子の刊行や、調査成果・資料を活用した学習会等を通して普及・継承を図ることを目的としています。また、紙媒体のみでなく、本市教育委員会が運営しているウェブサイト「なんじょうデジタルアーカイブ」(なんデジ)も活用し、デジタル化した市町村史や写真、学習会等の映像を公開することで、さらなる情報の拡大・充実化に努めています。

令和5年度(2023)事業一覧表

年	事業内容	備考		
通年	オーラルヒストリー・プロジェクト(市内在住者への聞き取り調査と記録)	「なんデジ」に公開		
	沖縄戦体験の証言(玉城地域)の原稿化と話者への掲載確認作業			
	「南城市の戦後史編 上巻 産業」調査・研究			
年	月	事業内容	備考	
2023	6	南城市立知念中学校 平和学習会(台風のため中止)		
		「知念のやんばる疎開」動画作成、公開	「なんデジ」に公開	
	8	戦争体験証言を用いた教材開発ワークショップ(台風のため中止)		
	9		「なんじょうデジタルアーカイブ」写真展開催(9/1～9/13)	
			講演会「男はウミンチュ(海人)・女はカミンチュ(神人)-久高島の歴史と文化-」開催(講師:赤嶺政信氏)	「なんデジ」に公開
			「笑顔が戻ってきた日」写真展開催(9/15～9/22)	
11	民話劇開催(南城市立玉城小学校)	「なんデジ」に公開		
2024	1	民話劇開催(南城市立馬天小学校)	「なんデジ」に公開	
	3	『なんじょう歴史文化 年報』発刊	「なんデジ」に公開	

沖縄戦体験の証言(玉城地域)

2006年(平成18)に南城市が誕生して以降、沖縄戦体験にかんする多くの聞き取り調査が行われ、2020年(令和2)に『南城市の沖縄戦 資料編』、2021年(令和3)に『南城市の沖縄戦 証言編-大里-』が刊行されました。

しかし、新型コロナウイルス感染症による作業の遅滞により、計画変更を余儀なくされ、現在も玉城地域、知念地域、佐敷地域の証言が未発表のまま数多く残っています。

これらの貴重な証言を次世代へ継承していくために、2022年度(令和4)より、過去の聞き取り調査の内容を原稿化し、話者ご本人またはご家族へ、文章の校正や掲載・公開許可の確認を行ってまいりました。

今回は、その中で許可をいただいた話者17人(今回は玉城地域出身者のみ)の証言を本紙にて掲載いたします。

沖縄にとって沖縄戦は、最も重要な歴史的事象のひとつです。戦争体験を後世に残していくために、引き続き証言の原稿化作業を行ってまいります。

体験を語っていただいた話者の皆さま、そのご家族の皆さまに対し、この場をお借りして感謝申し上げます。

証言掲載一覧※名前は敬称略、五十音順。

	名前	出身字名(現在の名称)		名前	出身字名(現在の名称)
1	新垣 世治	百名	11	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■
2	稲福 良子	玉城二区(玉城)	12	平良 新盛	垣花一区(垣花)
3	大城 勲	前川	13	知念 信夫	系数
4	大城 清子	仲村渠一区(仲村渠)	14	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■
5	大城 隆	當山	15	中村 秀雄	前川
6	神谷 依信	仲村渠一区(仲村渠)	16	前川 守幸	富名腰二区(愛知)
7	川平 チヨ	富名腰二区(愛知)	17	前原 静子	前川
8	喜舎場 清三	仲村渠二区 (琉球ゴルフ倶楽部)	証言に出てくる主な用語集 ※証言に出てくる主な用語の読み方や意味について解説しています。		
9	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■			
10	座波 次雄	百名			

協力者一覧※敬称略、順不同

山内優希(北中城村教育委員会)

山城彰子(北中城村教育委員会)

中村春菜(琉球大学非常勤講師)

ひめゆり平和祈念資料館

一般社団法人 養秀同窓会

母と 2 人で無縁故疎開

私は父（世昇）、母（キク）、父方の祖母（ウシ、明治 24 年生まれ）と一緒に暮らしていた。昭和 19 年（1944）、母と私の 2 人は熊本に無縁故疎開をした。警察官だった父は当時石垣島で勤務しており、祖母は玉城（現 南城市）に残ることになった。

母の姉（幸喜オト）とその子どもたち（節子、武男、ヨシ子、エミ子）、母の妹（光江）も私たちと一緒に疎開した。親族が一緒だったので、母は私を連れて疎開することを決めたのだと思う。

沖縄から持参した荷物は手で持てるくらいの量だったことを覚えている。鹿児島までの航行中に、一度みんな甲板の上に集められ、救命道具を着せられた思い出がある。

宮原での疎開生活

鹿児島からは疎開先の熊本県阿蘇郡小国町宮原へ移動した。宮原に着くと、宮原国民学校の広い講堂のような場所で地元の方々が歓迎会を開いて下さり、ごちそうをいただいた。

その後、宿舎の善正寺に移動した。善正寺には、私たちや母の親族を含め 20 人弱の百名の人々が疎開していて、私たちは本堂で寝泊まりしていた。宮原の他のお寺には、奥武などの玉城村の人々が疎開していた。

お寺の近くの川では、持っていったザルを使って魚とりをよくしていた。お寺の門を入れて左側には小さな山がある庭になっていて、そこでは住職の息子と一緒に竹馬に乗って遊んでいた。杉林が多い地域だったので、杉の木の下でもよく遊んでいた。

宮原で空襲はなかったが、一度、空を全部覆いつくすぐらい多くのアメリカ軍の飛行機が飛んでいくのを見たことがある。それ以外は平和で、日本兵を見たこともなかった。訓練中にサイレンが鳴った時に防空頭巾をかぶったり、灯火管制の訓練で明かりを覆ったりしたことはあった。

おじの復員でお寺から移動

終戦後、母の姉（幸喜オト）の夫（邦盛）が復員してきた。幸喜家と私の家族は善正寺から歩いて行ける場所にあったトタンの空き家を借り、そこに住むようになった。家の近くには柿の木があったのを覚えている。また、家から少し離れた大きな川の近くには泉があった。その泉へ、いとこの武男と一緒に水汲みに行くのが毎朝の日課だった。泉の前には大きな栗の木があり、朝にそこで栗を探すのが楽しみだった。

当時、母たちは食べ物を闇市から仕入れてきたり、「今日はあの農家、明日はあの農家」という風に地域の農家の手伝いに行き、食料をもらってきたりしていた。おじの邦盛が働き盛りだったこともあり、ひもじいという思いはあまりしなかった。

お風呂は家の近くにあった公衆浴場を利用していた。小国町には杖立温泉という有名な温泉があ

り、そこに旅行のような感じで家族で行ったことがある。

私は宮原で小学校に入学したが、途中で沖縄に帰ったので1学期か2学期までしか通わなかった。クラスには沖縄の子どもたちも何人かいた。

沖縄への引揚げ^{ひきあげ}

沖縄に帰る前には疎開先の人々への感謝をこめて、小学校（宮原国民学校）の運動場で「稲摺節」^{いにしりふし}や芝居などを上演した。



宮原国民学校の運動場で撮影された写真。百名の人々を始め、玉城村からの疎開者たちが写っている。「稲摺節」の衣装を着て写っている人も見える。（座波喜美子さん提供）

その後、沖縄行きの船に乗る前には DDT をかけられた。沖縄では中城の港に着いたと思う。そこで黒人兵を初めて見て、怖くて目を合わせることができなかった。百名に帰ってきた時にはユウナの花が咲いていた。

百名のわが家は、戦前の家屋は残っておらず、小さな茅葺き^{かやぶ}ヤー（茅葺き小屋）になっていた。中には避難民が何人か住んでいたが、長期間住むことはなかった。のちに、この時の避難民の子どもが大人になり、「お世話になりました」とわが家を訪ねて来た。

わが家の隣の大きな瓦屋根の家には、食料会社の重役などの偉い人たちが避難民として入っていた。

戦後

戦時中に石垣島にいた父は、於^{おもと}茂^{ふもと}登^{しらみず}岳の麓にある白水森林に住民を避難させていた際、マラリアに罹^{かか}って亡くなった。私が成人して就職した後、石垣に転勤になり、その時に父方の親族を連れて、父が亡くなった白水森林に拝みに行った。

玉城に残っていた祖母は沖縄戦を生き延び、数え 108 歳まで生きた。カジマヤー（97 歳のお祝い）の時には集落のみんなにお祝いをしてもらった。

昭和 40 年（1965）頃、疎開先の宮原を訪ねた。また、善正寺の住職夫妻が百名に来たこともある。その時には沖縄本島一周の観光をした。また、疎開者みんなで集まり、百名公民館で歓迎会を開いた。

（事務局による聞き取り 2018）

いなふくよしこ
稲福良子 (旧姓東恩納 昭和4年生まれ)

〈学童疎開〉

ほうげんふだ 方言札と竹やり訓練

戦前、私は玉城国民学校たまぐすくこくみんがっこう（現在の玉城小学校の前身）に通っていた。学校ではウチナーグチを話すことが禁止されていて、話すと方言札を首から下げなければいけなかった。家ではウチナーグチを使うが、学校では標準語を使わないといけない。「方言札をつけられないか」とみんなびくびくして、話しもできなくなった。

学校では竹やり訓練もした。アメリカ軍は機関銃を持っているのに、日本人は竹やりで一生懸命訓練をしていた。日本は馬鹿な戦争をしたものだと思う。ちなみに、のちに学童疎開がくどうそかいで行った大分の学校では、竹やり訓練はしなかった。

兄の村葬

わが家では兄3人が兵隊として従軍した。長男の盛順は海軍兵として南方で戦死した。次男のセイコウは中国の戦地に行っていた。三男のセイジョウは熊本で終戦を迎えた。

盛順が亡くなった時には、たくさんの人が村の忠魂碑ちゅうこんひの前に集まって村葬を行った。村葬の内容は覚えていないが、戦死者は英雄のようにととてもあがめられていた。盛順の奥さんは綺麗な着物を着て身だしなみを整えていた。村葬は盛順の時までは行われていたが、その後はあまり行われなかったと思う¹。

がくどうそかい 大分県へ学童疎開

私は国民学校高等科2年生だった15歳の時に、学童疎開で大分県に行った。家族の中で学童疎開で沖縄を離れたのは私1人だけだったが、あとから兵庫県の紡績工場に勤めていた姉の光枝が、兵庫県が空襲に遭ったため大分の私の元に合流した。姉は、沖縄に帰るまで学童疎開の子どもたちとずっと一緒にいた。

私たちの船は対馬丸つしままるが撃沈された後の出航だったため、自分は疎開に行きたくなかったが、荷物（着替えだけだった）を先に積んでしまっていたので仕方なく出発した。私たちが乗ったのは大きな船だったが、乗船後なかなか出航しなかった。船員に「船を早く出さないのか」と聞くと、「この船の両側に護衛艦がつかないと出発できない」と言われた。護衛艦が来るまでに10日以上待たされた。その間、船の中で泣いていた子どもたちはいっぱいいた。あまりに泣くので船から降ろされ家に帰された子もいた²。

¹ 平和の礎刻銘者名簿（沖縄県平和援護・男女参画課より2018年提供）によると、盛順さんの戦死年は昭和17年（1942）である。

² 玉城村史編集委員会編『玉城村史 第6巻 戦時記録編』（玉城村役場 2004）に収録されている、学童疎開引率教員の喜名盛敏の手記によると、稲福さんが参加した玉城国民学校の第2陣学童疎開の一行は1944年8月20日に那覇港へ向かうが、疎開船が撃沈したという報せを受けたためいったん玉城に戻って2週間ほど待機したのち、再び那覇港に集まってその日に出港した。しかし船は船団を組むために本部町の渡久地港に向かい、そこで11日間停泊していたという（前掲『玉城村史 第6巻 戦時記録編』921～922頁）。稲福さんが話しているのは、この渡久地港でのことだと思われる。

家ではイモばかりの食事だったので、船の中で白いご飯と昆布の佃煮^{つくだに}を食べることができたのは嬉しかった。今でも忘れられないほどおいしかった。船の中では飲み水が入った^{いっしょう}一升びんをずっと持たされていた。(アメリカ軍の潜水艦が現れたという警報が出ると)甲板に上り、攻撃されたらすぐ海に飛び込むように言われていた。

船が鹿児島に着いたときはとっても嬉しかった。鹿児島では自由行動の時間が与えられたので、持っていた小遣いでいろいろなものを買って食べた。鹿児島で旅館に泊まった後、玉城国民学校の学童たちは大城先生の1班、吉元先生の2班、喜名盛敏先生の3班に分かれて、それぞれの疎開先へと向かった。私は3班で、汽車に乗って大分県の直見駅(現 佐伯市)まで行き、そこから疎開先である中野村^{かさかけ}笠掛(現 佐伯市)に行った。

笠掛^{かさかけ}での生活

現地では婦人会の方々がわら草履^{ぞうり}や三角のおにぎり、瀬戸物のお椀^{せともの}を準備して迎えてくれた。衣類も村の人たちが寄付してくれた。笠掛に着いてからの数日間は、地元の女性たちが食事を作ってくれた。

婦人会の方々は南方のはだしの野蛮人が来ると思っていたのかもしれないが、私たちがみんな靴を履いているのを見て、わら草履をお寺のお御堂^{みどう}の床下に投げ込んでいた。のちに私たちは、学校の行き帰りにこのわら草履を履いた。冬にも靴下を履かずわら草履ばかり履いた。後に草履はぼろぼろになったのでとても寒かった。あんなことは二度と繰り返したくない。

私たちは福圓寺^{ふくえんじ}というお寺のお御堂に宿泊し、そこから中野国民学校に通った。地元の子どもたちとの交流もあった。学校では運動会もあった。学童疎開には炊事係の女性(稲福ツルさんという方がいたのを覚えている)も同行していたが、料理が上手だった。笠掛の隣の切畑村^{きりはた}(現 佐伯市)には吉元先生が引率していた玉城の疎開学童たちがいて、山峠を越えて切畑に行ったことも何度かあった。

笠掛でのことは思い出したくない。食事は量が十分でなく、「あんたの弁当箱にはいっぱい入っている、自分のは少ない」と言って、みんなでけんかばかりしていた。シラミもいっぱいいたので、私たち上級生が風呂場でみんなの着物をコトコト煮て洗った。どんなに煮て洗ってもまた出てくるヤクジラミだった。

笠掛は田舎だったので空襲もなく、戦争中だという感じはしなかった。長崎に原爆が落とされたという話も聞いたが、子どもなのでよくわからず、何も感じなかった。いつも戦争に「勝つ、勝つ」と思っていたので、日本の敗戦を聞いた時にはみんなで泣いた覚えがある。

笠掛の農家に預けられる

国民学校を卒業した学童は、国からの学童疎開者のための配給(お米など)を受けることができなかった。そのため私は、笠掛の稲葉さんという農家のおじいさんが頼みに来ていたこともあり、卒業後は福圓寺を出て、稲葉家に子守として預けられた。稲葉家にはおじいさん、娘のケサコさん(ケサ姉と呼んでいた)、ケサコさんの息子のテツヤ(当時3、4歳)がいた(ケサコさんの夫は従軍し

ていて不在だった)。稲葉家には沖縄に帰るまでお世話になったが、そこに行ってからはご飯もいっぱい食べることができて嬉しかった。なお、笠掛に疎開していた学童のうち、大阪などの本土に親やきょうだいが来ていて引き取られていった子もいた。

稲葉家とは戦後もずっと交流が続いている。テツヤさんは沖縄に来たこともあるし、毎年梅やお米を送ってきてくれる。私は送ってくれた梅で梅干を漬けている。

終戦の翌年、軍医として従軍していた玉城村富里（現 南城市）の大城幸隆先生が復員し、家族が疎開している笠掛に引き揚げてきた。その時に村の各家庭を回って「ありがとうございます、みんなお世話になりました」とあいさつに来ていた。私のいた稲葉家にも来てくれたが、その時の面影が忘れられない。

佐世保から沖縄へ引揚げ

沖縄に帰るときには国からお金をもらえた。沖縄は玉砕して何もないと思っていたので、お椀などいろいろなものを買った。

その後、私たちは長崎の佐世保港から船に乗って沖縄に帰った。沖縄に帰れるということで嬉しい気持ちでいっぱいだったが、「お母さんやきょうだいは元気かな」という不安もあった。

船から降りると、アメリカの黒人兵にみんな頭から DDT をまかれた。私たちはインヌミ屋取（現 沖縄市）³ に収容され、いろいろな話を聞かされてから、トラックに乗せられて玉城（現 南城市）に帰ってきた。トラックで「家あるかな、無いかなー」と見ていたら喜名先生の家が見えて、先生は「ああ、ワッター家ー残トウサーー」と言ってとっても喜んでいた。

ところが、集落に帰ってもだれもいない。「みんな死んだのかな」と不安になったが、小学校の運動場まで行くとちょうど運動会をしていてみんなそこにいた。祖母のウタだけは戦後すぐに、食べるものがなくて栄養失調で亡くなってしまったそうだが、ほかの家族は生きていたので本当に嬉しかった。

わが家は戦争で焼けてしまい、家があった場所にテントが建てられていた。戦後の玉城は食べ物がなく、国も食料をくれなかった。スーチチバー（ソテツの実）の根っこを掘り、ターチンメー（^{でんぶん}澱粉のかすを煮た料理）を作って食べたこともあった。のちに私は喜名先生の奥さんに声をかけられ、長い間喜名家の家政婦として働いた。

（中村春菜・事務局による聞き取り 2016
事務局による聞き取り 2018）

³ 引率の喜名盛敏や、同じ疎開学童だった大城善良の証言では、収容されたのは久場崎収容所（中城村）だとされている（前掲『玉城村史 第6巻 戦時記録編』932、938頁）。

戦前の暮らし

私は戦前、両親と私たちきょうだい5人、祖父母とおじ夫婦の11人で暮らしていた。前川集落^{まえかわ}の住民は基本的にみんな農家で、どの家も2、3の畑を持っていた。うちも農家で乳牛も飼っていたので、食料に困ることはあまりなかった。

兵役を終えた人たちが集まって、消火活動や防空演習、軍事訓練などを指導していたのを覚えているが、当時私は子どもだったので細かいことは覚えていない。また、「焼夷弾^{しょういだん}が落ちてきたら砂をかぶせて消火しなさい」と言われ、家の前には砂を盛り、バケツに水を入れておくように指導されていた。

出征兵士^{しゅつせい}の送り出しやお迎えは、前川ではワイトウイ（岩の切り通しの道）で行われていた。家の門はソテツや日の丸、旭日旗^{きよくじつき}で飾られ、区民1人ひとりが旗を持って送り出しやお迎えをした。（兵役を終えて）帰ってきた兵士は稲嶺^{いなみね}十字路から前川まで歩いてしたが、字中^{あざじゅう}が大変な歓迎ぶりだった。

〈ミーヤフス〉¹という家が商店を営んでいたが、私はそこに祖父や父が吸うたばこを買いに行かされていた。だが、戦争直前になると、たばこはもう自由に買えなくなっていた。

軍に校舎を取られた学校生活

前川から玉城国民学校^{たまぐすくこくみんがっこう}（現在の玉城小学校の前身）までは徒歩では遠いので、1年生の時だけは前川にあったムラヤー（公民館）で勉強していた。

前川に軍隊が入り込んできたのは昭和19年（1944）で、部隊は武部隊^{たけ}（第9師団）だった。武部隊は玉城国民学校に駐屯^{ちゅうとん}し、前川の広場にも天幕^{てんまく}（テント）を張って生活していた。そのうち、大きい民家にも兵隊が寝泊まりするようになった。昼間は区民も一緒に壕掘り^{ごうほり}作業に駆り出されるようになった。

学校に軍が駐屯し始めてからは、校舎が使えなかったので、3年生以下は各字のエーキンチュ（金持ち）の家で勉強していた。5年生以上は強制的に軍の防空壕掘りに駆り出されていたが、私は3年生だったので働かされたことはなかった。

青年学校は現在の玉城中学校の敷地内に設置されていた。生徒は模擬鉄砲^{かま}を構えて軍事訓練などをしていた。

私は学童疎開^{がくどうそかい}に行くことを希望し、疎開予定者の1人になっていた。だが私がおばあ子だったこともあり、祖母は「絶対に行かさない」と言って疎開を許さなかった。

¹ 本稿では、屋号は 〈 〉 で括弧で表記する。

兵隊と寝食をともにする

(武部隊、その後の石部隊に代わって)球部隊が前川にやってきた時には相当な人数の兵隊がいて、私たちの家も宿舎になった。私たち家族はシム(台所)の方で寝ることになった。朝ごはんは兵隊と一緒に食べていた。うちは農家であまり食料に困っていなかった。乳牛も飼っていた。なので、朝食には牛乳や、黒糖、野菜炒めなども一緒に出していた。兵隊たちは、「私たちは他の家庭に入った兵隊よりもずっと幸せだな」という風に言っていた。

区長を通して、軍から食料供出の命令がくることがよくあった。私の家は、シブイ(冬瓜)やチンクワ(金瓜・カボチャ)などを供出していた。

1つの分隊あたり13人ほどいたと思うが、沖縄戦が始まると首里戦線にみんな駆り出された。後に、3人ほどしか戻ってこなかった。彼らは南部に撤退する前の晩、私の家の防空壕に私たちと一緒に入っていた。ある兵士は「皆さんはもう捕虜になった方がいいよ」と言っていた。彼は状況をわかっていたのだと思う。戦後、彼から音沙汰がないので、彼は(沖縄戦で)亡くなってしまったのかもしれない。

最初の艦砲射撃と火の海になった前川集落

学校の終業式は、昭和20年(1945)3月23日に行われたと思うが、その日、家から外れた場所にカンポウが落ちてきた。爆弾の破片は、ピカピカ黒光りしていた。直径6メートルくらいの穴ができた。空からは土や石が降ってきた。(これらが地上に衝突して)この舞い上がった石などに当たって亡くなる人も多かった。大変なことになったなと思った。

私の家の防空壕は簡単な造りだったが、家族11人が寝泊まりできるくらいの広さがあった。屋根の部分は厚みがあってわりとしっかりしていた。高さ1.2メートルほど、幅は1メートル少しあったと思う。2、3日はそこに避難していたと思う。

その後、3月26日頃だったと思うが、アメリカ軍が前川集落に、空からガソリンか何かの油を撒いて火をつけた。集落は火の海になり、小さなアリすら燃えたと思う。そのくらいひどい燃えようだった。区民は、初めのうちは屋敷内に掘った簡易な防空壕に避難していたが、それ以降は前川樋川のところに掘っていた民間防空壕で避難生活を送るようになった。

前川の民間防空壕へ避難

私たちも、親戚から前川樋川のところの壕に避難するよう誘われて、そこに移動した。父は防衛隊に取られ不在だった。

母は前川にいたら危ないかもしれないと考え、私の妹を連れて、母のおじと一緒に避難壕を探しに南部に出掛けた。しかし、母と妹は帰らぬ人となってしまった。母のおじは、母と妹の亡くなった場所を覚えていたので、戦後、母の妹と一緒にそこへ行き、収骨した。

「もう殺される」としか思わなかった

5月下旬頃、「アメリカ軍がすぐそこまで迫っている。ここにいても危ない。捕虜になったら犬

死にさせられるよ」と聞いた。それ以降、多くの人が壕を出て南部へ向かうようになった。そのせいで非常に多くの区民が命を落としてしまった。壕に留まっていたらみんなアメリカ軍の捕虜になって助かったと思う。一家全滅してしまっただけの家も何軒かある。

私たち家族は壕に留まっていた。その後、5月29日か30日ごろ、年配の沖縄人男性が、壕の外から「出てきなさい」と声掛けをしていた。初めは警戒して出ていかなかったが、アメリカ兵が壕の入口で銃を構えていたので、(出ないと銃殺されると思い) みんなで捕虜になろうと決意した。

初めてアメリカ兵を見たときは、人種も違うしヤギのような眼をしていると思って怖かった。「あいつらは人も食べるってよ」といううわさも、よく聞いていたので、捕虜になった時は「もう殺される」としか思わなかった。

志喜屋の収容所へ

捕虜になったあと、まずみんな前川のワイトゥイ(岩の切り通しの道)に集められた。それからアメリカ兵に連れられて、富名腰一区(現南城市)の焼け残っていた家(上湧上)に集められた。そこに着く頃にはもう夕方になっていたので、そこで1泊した。翌日は歩いて知念村(現南城市)志喜屋の民間人収容所へ移動させられ、そこに入れられた。

志喜屋に向かう道中にはアメリカ兵が歩哨として立ち、避難民に食料を配っていた。初めは毒が入っていると思い誰も食べなかったが、1人が食べて毒が入っていないことがわかるとみんな食べ始めた。この時に初めて、捕虜になっても殺されないと実感した。

志喜屋では、私たちと一緒に捕虜になった5世帯くらいの家族とともに1つの家に住むことになった。食料の配給はあったが全然足りず、避難民数人で一緒になって、前川あたりまで芋掘りや食料収集に行っていた。アメリカ兵による婦女暴行が起きていたので、女性が芋掘りなどを行っている間には、(自衛のために)見張りを立てるようにしていたようだ。収容所内の家でも、若い女性は身を守るために、床下や家の一番奥に寝かされていた。

志喜屋の収容所がいっぱいになった後、現在の宜野座村に移動させられた人たちもいた。そこから前川に帰ってきた人たちは、「やんばるは何もなくて大変だったよ」とよく話していた。

8月15日の夜には、日本が敗戦したということでアメリカ軍が空砲を撃った。もう沖縄での戦争は終わったはずだが、また始めるのかと思ってびっくりした。

防衛隊に取られた父の死

防衛隊に召集された父は、米須(現糸満市)周辺で亡くなったと聞いている。初めは志堅原(現南城市)に配属されていたようだが、その後、豊見城(現豊見城市)の高安に行き、そこから米須に移動して亡くなったそうだ。このことは、父と同様に前川から召集された人から聞いた。昭和21年(1946)5月には収骨できた。収骨には祖父母と、伊江島の防衛に行っていたおじが行った。(収骨した場所には)父の他にも亡くなった人がいたが、父は時計をしていたので、すぐに父の骨と分かったそうだ。

戦後の生活と戦争を経験しての思い

前川には翌年の4月か5月頃に戻った。すべて焼け野原になっていて自宅には戻れなかったので、現在の公民館の近くに小屋を建て、1ヵ月ほどそこに住んでいた。その後、元の屋敷跡に家を建てて戦後の生活を始めた。

船越にはアメリカ兵を相手にした慰安所^{いあんじょ}ができていた。その女性たちを見たことがあったが、子どもたちは大人から「子どもはあそこに行くな」と言われていたので、彼女たちがどのような暮らしをしていたかはよくわからない。

両親と妹を亡くした私は祖父母に育てられた。70年が過ぎても、沖縄戦での心の傷は消えない。誰1人として同じ戦争体験をしている人はいない。亡くなった人だけが戦争の犠牲者ではないと思う。沖縄の人はみんな近い親戚を戦争で亡くしているの、県民みんなが戦争の犠牲者だと言えると思う。

私自身、長いこと戦争のことを語らなかったが、伝えないといけないという使命があるので、私は1日使っても沖縄戦の話をする事ができる。

(中村春菜による聞き取り 2016)

軍歌の中で育った少女時代

私が生まれた2年後の昭和6年（1931）に満州事変があり、私は6歳の頃から軍歌を覚えていた。その頃、優しい歌はなく、私は軍歌の中で育った。父は夕食後に私を抱いて軍歌を歌った。私は、意味は全然分からなかったが一緒に歌って歌詞を最後まで覚えた。来客があった時は「ここは御国を何百里〜♪」と歌って聞かせたこともあった。

家の一番座には大麻や天照大神に関係するものが祀られていて、私は毎朝顔を洗ってから拜んでいた。

戦時下の教育

玉城国民学校（現在の玉城小学校の前身）には奉安殿と忠魂碑があって、校門から入ると奉安殿の方向に最敬礼してから校舎に入った。

奉安殿の中を生徒が見ることはできなかったが、中には御真影と教育勅語が入っていた。紀元節¹などの儀式の際、校長先生が奉安殿から何かを取り出して、前を通る時には生徒はみんな頭を下げた。また、校長先生が「朕惟ふに…」と教育勅語を唱える時には、みんなかしこまって咳1つできなかった。教育勅語は小学校の高学年ぐらいにならないと意味がよくわからなかったが、学校では暗唱試験もよくさせられた。

戦死者が出ると、忠魂碑の前の運動場いっばいに婦人会、青年会、生徒など村の人たちがみんな集まって村葬をした。

小学校（国民学校）に通っていた頃は、毎年12月8日に字ごとに集まって、加茶原にある「ナカチ」のお墓にお参りしていた。そこは日露戦争で戦死した加茶原出身の方のお墓ということだった。彼がどのように亡くなったかなどの詳しい話は聞いたことがなかった。

百名での献穀田田植式

昭和19年（1944）の2月に、百名で献穀田田植式が行われた。稲を植える早乙女役は美人な未婚女性と決められていて、各字から1〜2人ずつ選ばれたが、とても美人な人たちだった。早乙女たちが稲を植える時に「献穀田御田植式の歌」を歌う歌姫の役は、国民学校高等科1年の女生徒たちが務めた。田植式の前には合宿をして、歌に合わせて田植えをする練習をしていた。

早乙女たちは菅笠に赤いたすき、脚絆という大和風の格好をして、歌姫たちの「今日はめでたや玉城村の献穀田の御田植え」という歌に合わせて田植えをし、「ユラティク、ユラティク」と後ろに下がっていった。当時高等科2年生だった私は、稲刈りの時には卒業していることになるため参

¹ 神武天皇が即位したとされる2月11日を祝った祝日のこと。四大節（新年節、紀元節、天長節、明治節）のひとつ。

加せずに見学していた。

稲刈りの頃には空襲が始まっていたため、大がかりな儀式はできずに簡単に刈り取ったと思う。刈り取りは各字から選ばれた男性が行った。精米したお米は、早乙女たちがお箸で一粒一粒、欠けがないかを何日もかけて点検したと聞いた。皇居に奉納するものだから、少しでも欠けるといけないということだった。

女子青年団での活動

私は10人きょうだいの長子で、昭和19年(1944)3月に玉城国民学校の高等科を卒業した。父は長女である私を女子師範(沖縄師範学校女子部)に入れたがっていたが、軍国少女だった私は日の丸鉢巻・もんぺ姿でお国のために奉公する軍国少女に憧れていて、内地の軍需工場に行くことを希望していた。親に内緒で、女子師範の受験の申し込みをしなかったため、あとから父にうんと怒られた。

高等科卒業後は仲村渠一区(現南城市)の女子青年団に入った。私はよくわからないうちに副会長にさせられた。昭和19年当時の団員は10人ほどだったと思う。同級生は私の他に4人いた。

女子青年団では負傷兵の応急手当(当時は救急法と呼んでいた)、出征兵士を出した家庭での奉仕作業(主に畑作業だった)、出征兵士の見送り、竹やり訓練などをした。救急法は富里の大城幸雄医師を講師として学校に招き、けがをしたらどこを押さえる、三角巾でどこを縛る、などの指導を受けた。竹やり訓練は国民学校の頃から行われていて、指導者は青年学校の男性教員だった。今では笑い種になっているが、当時は「アメリカ兵はヒージャーミー(ヤギの目)で夜は目が見えないから、その時に竹やりで刺し殺す」と教えられたのをみんな真に受け、「えいっえいっ」と言って訓練していた。

軍の徴用と内地での奉公へのあこがれ

十・十空襲以降はずっと軍の徴用に行っていた。村役場を通じて軍への徴用命令が来て、小禄と読谷の飛行場建設や、南風原陸軍病院壕の壕掘りに参加した。女子の作業は土や石の運び出しが中心だった。どの場所も裸足で歩いて行き、2週間ほど、現地の民家の一番座に泊まり込みながら作業をした。

休憩時間には、日本兵も一緒に「勝利の日まで」の軍歌を歌った。戦争に勝つために働いていたし、日本が負けるとは思っていなかったのも、この頃はまだ楽しかった。作業が難儀だとは全然思わなかったし、「自分の体は国のためにある」と本当に思っていた。

私は内地での奉公を夢見て女子挺身隊にも入った。だけど、当時は多くの船がアメリカ軍の艦船に撃沈されていたことと、祖母の面倒を見る人がいなくなるということで、父親に反対されて内地には渡れなかった。内地に行く前の那覇での研修も受けさせてもらえなかった。

戦前の婦人会と村民の戦争協力

戦前の仲村渠一区の婦人会の会長は学校教員の喜名和子先生だった。当時の弁当は芋が2つだっ

たが、喜名先生は「これでは栄養が不足する。将来は皆兵隊になるというのに、これでは兵隊になる力もないよ」と言って、婦人会員を集めて栄養のある弁当を作る講習会を開いた。「芋は皮をむいてから弁当箱に入れましょう、きな粉をふりかけましょう、カチューグラー（かつお節）を炒ってふりかけましょう。おかずも漬物にして、油でちょっと炒めたら良い弁当になるよ」と、一生懸命に指導していた。

そのほか、婦人会の人たちが出征兵士の見送りをしたり、エプロンやたすきをかけて、戦死者の出た家庭の弔問に行ったりしていたのを見たことがある。また、玉城に駐屯していた部隊の隊長が、炊事やいろいろな手伝いを婦人会に指示していた。

富里（現 南城市）の嶺井百合子さんと、もう1人の先生で富里の公民館に託児所を開設し、2人で運営していた。託児所には女学校の生徒たちも手伝いに来ていた。

各家庭では各自、供出のため、鉄鍋などの鉄製品を公民館かどこかに持って行ったこともあった。

沖縄戦前夜の大城家

昭和19年(1944)に母と弟妹たちが熊本に疎開してからは、わが家には父（役場勤めをしていた）、父方の祖母（当時70歳を過ぎていた）、私の3人が残っていた。

夏に玉城に来ていた武部隊は、わが家には駐屯せずテント住まいだった。しかし12月に石3596部隊が来てからは、瓦葺きの家だったわが家に大勢の兵隊が駐屯するようになった。家の一番座、二番座、裏座に兵隊たちが入ったため、私達3人は台所で寝泊まりするようになった。わが家に宿泊していた兵士の中で、戦後生き残った2、3人の方とは交流した。

やんばるへの疎開と帰村

沖縄が戦場になるということで、「南部の人たちはみんなやんばるに疎開しなさい」という命令が出たが、多くの人はいきたがらなかった。父は役場の職員なのでみんなに模範を示さないということで、私に「おばあを連れてやんばるに行け」と言った。最初は「おばあを連れてやんばるに行けば逃げるみたいじゃないか？私はこっちでお国のために働く」と言っとうんと反抗したが、父に「必ず行け」とむりやり行かされた。祖母も70歳を超していたので1人では行けなかった。祖母は戦後すぐにマラリアで亡くなったが、祖母を連れて行ったおかげで私は生きのびた²。

終戦後、疎開していたやんばるからはいったん船越収容所に移動させられた。私はおばあが下田（現 南城市）にいたので、その日のうちにすぐ仲村渠の家に帰れた。

他の人たちは船越で1～2泊してから自分のシマに帰っていたが、当時は立ち入り禁止で帰れない区域も多かった。その頃の船越は、収容所といってもテントが張ってあるだけだった。

終戦後の気持ち

女子青年団の同級生4人は玉城に残り、アメリカ軍上陸後には軍に協力して救護班として活動し

² やんばる疎開の時の体験記は『玉城村史 第6巻 戦時記録編』251～256頁に収録されている。

た。彼女達は、傷ついた兵隊を摩文仁（現 糸満市）まで担架で運ぶ途中で爆撃を受けて亡くなってしまったと聞いた。私は自分だけ安全なところに行って申し訳なく思った。

8月15日に終戦したということは、情報網もなかったのではっきり知らなかったが、どこかで「日本が負けたよ」と聞いても、まさかとしか思わなかった。いつか日本がまた勝って沖縄を助けに来てくれる、それまで辛抱して待っておこうという気持ちがあったので、軍国主義の思想を変えていくのが大変だった。

戦前の教育は間違っていたと思うが、昭和天皇のことは心から尊敬していたし、それは戦前も戦後も変わらない。悪かったのは軍部で、天皇は戦争を最後には終わらせたし、大変苦勞をなさったと思う。

戦火の中でまもられてきた百名婦人会の資料

百名婦人会（2018年に解散）の大正8年（1919）からの資料が、戦後もずっと残されてきた。沖縄戦の時には、戦前に会長をつとめていた大城マサさんが、壕を転々として避難する中で大事に持ち歩いて下さった。戦後、マサさんのお家にその資料が保管されているのを私が発見し、資料はのちに百名公民館に保管されるようになった（現在、資料の保管場所は不明）³。

（事務局による聞き取り 2018）

³ 2016年、2017年に資料を撮影した画像データがあり、南城市教育委員会文化課が所有している。2018年に事務局で再度、百名公民館の書庫を探したが資料を発見することはできなかった。

かつお節を口に含んでの航海

私の父（福清）は三菱の社員だったが、戦時中は主計中尉として満州に召集され、のちに南方へ移った。母（美枝）と私、妹（渥子）は當山にある父の実家に身を寄せていたが、昭和 19 年（1944）に 3 人で熊本に疎開した。

疎開のきっかけはよくわからないが、海軍司政官としてボルネオに派遣されていた母方の祖父から「沖縄も危ないから疎開に行ったほうが良い」という連絡があったということ、母が生前に話していたような気がする。祖父はボルネオで、若い兵士が伝令に行く際、「お前は若いから」と代わりに行って戦死したらしい。

母は疎開船がアメリカ軍に撃沈げきちんされることを覚悟の上で乗船したようだ。「船が撃沈された時には、削られて小さくなったかつお節を子どもの口に含ませておくと、海水の塩分がやわらいで（薄くなって）助かる」と母は聞いたらしく、船の甲板で私と妹の口にかつお節を含ませていたようだ。船はアメリカ軍の潜水艦せんすいかんに追われたが、ジグザグ航法で逃げ切ったという。母は私と妹を抱きしめておびえながら、アメリカ軍の潜水艦せんすいかんの潜望鏡せんぼうきょうが白波を立てて走るのを見ていたようだ。

下船地は不明だが、そこから列車で熊本に移動していた際、アメリカ軍のグラマンからの機銃きじゅう掃射そうしやを受けて死傷者が出たらしい。

熊本での疎開生活

私たち一家は熊本県の来民町くたみ（現 山鹿市）の民家で間借りをすることになった。その後、昭和 20 年（1945）の末頃には、同じく熊本県に疎開していたお婆一家（父の姉である嶺井百合子、その息子の進と邦男）と合流した。

疎開先の近くには製材所があり、乾燥させるためか多くの板が立てかけられていた。家の前にはたまねぎ玉葱畑が広がり、一面に咲いた葱坊主ねぎぼうずの白くて丸い花が美しかった。

幼かったからかいじめを受けた記憶はないが、川遊びで従兄の進が近所の悪ガキたちに水中に引きずり込まれたことがあった。また、私は村の共同井戸に立小便をしたそうで、母は 1 日掛かりで水を汲みだしたらしい。疎開先ですごくお腹が減っていたような記憶はない。

父の復員と沖縄戦の傷

終戦後、父が熊本に復員してきた。その後、父が宮崎県にあった三菱の鉱山に赴任することになったため、お婆の家族とは別れて一家で宮崎に移った。その後も父の転勤先にあわせて家族で一緒に移り住み、私も県外の学校に進学した。私は昭和 55 年（1980）に沖縄に帰ってきた。

沖縄戦で、當山の家は艦砲射撃で焼け落ちた。現在も残っているヒンプンには斜めに走るひび割れがあるが、これは火災の熱によるもので、わが家に残る唯一の戦争の痕跡である。

（事務局による聞き取り 2018）

いちゅう 一中へ入学

私は玉城国民学校初等科（現在の玉城小学校の前身）を卒業したのち、昭和17年（1942）4月、一中（沖縄県立第一中学校）¹に入学した。

一中を受験したのは、一中が好きだったからだ。字に一中を出た先輩がいたし、当時は沖縄の偉い人たちの中には一中出身者が多かった。一中の受験では、学校からの内申に加え、3日間の口頭試験や体力検査が行われた。当時は軍国主義なので体力が重視されていた。筆記試験はなかった。

当時、一中には玉城村（現南城市）當山出身の嶺井先生がいて、嶺井先生が（玉城国民）学校に電話して合格を伝えてくれた。玉城では親慶原や當山の生徒も合格し、計3人が一中に合格した。当時、一中には沖縄県全体から受験生が集まっていたので、村内から5人受かるかどうか、という状況だった。

一中へは、首里にあったいとこのお姉さんの家に下宿をして通った。お姉さんの家には、私のほかに1期上の石嶺さんと、いとこの崎間福昌（鉄血勤皇隊で戦死）も下宿していた。

戦時下の学校生活

入学した昭和17年には戦争が始まっていて、配給の切符はあっても品物がなく、地下足袋を買うのにも苦勞した。学校へは地下足袋を履いて通っていたので、地下足袋は大事に使っていた。そのほかの時には、履き物はおもに下駄を使っていた。草履もあったが、学生は1週間で1足潰してしまうので、代わりに下駄を履いていた。しかし、下駄は材木の質によって、真ん中から裂けて駄目になるものもあったので、気をつけて歩いていた。

制服は1着しかなかったのので、破れると当て布を縫って補修した。教練²があったので、膝の部分がよく破れた。次第に、当て布の上に当て布をしないといけない状態になり、元の生地は縫い目のあたりに残っているくらいになった。当時の生活を考えると、相当苦勞し、頭を使っていたと思う。

教練は1年生の頃からあり、指導していたのは予備役の陸軍中尉たちだった。彼らは軍服を着て、学校の職員として勤務していた。配属将校も入れると（軍関係者は）5～6人いた。配属将校は現役将校で、予備役では配属将校にはなれなかった。

教練では、隊列を組んで校外へ二里³から三里の距離を行軍した。玉城村役場から那覇までが約三里半という距離だった。普天間（現宜野湾市）まで往復したこともあるが、往復では七～八里になるので、弁当を担いで行った。ちなみに、首里にアスファルトが敷かれたのが昭和18年（1943）

¹現在の沖縄県立首里高等学校の前身。

²当時の学校で教科の1つとして行われていた軍事的な教育や訓練のこと。

³一里は約4キロメートル。

だった⁴。ある晩、那覇港から上陸してきた兵隊たちが首里のアスファルトの道を夜10時過ぎから四列縦隊^{よんれつじゅうたい こうしん}で行進したが、すごい音がした。

学校では教練のほかに体操の授業もあり、柔道もしなければいけなかった。教練は毎日、体操と柔道は1週間に3回ずつはあった。2時間は外に出るので、腹を減らすのは当たり前。ヤーサワタ(空腹)を食いしばって頑張っていた。朝食は朝6時半に食べ、7時には学校に来ていた。遠いところから来る人は6時半には家を出ているので、2時間目の授業の頃には腹を減らしている。下宿や家から持ってきた弁当は、午前中の休み時間にはみんな食べてしまっていた。真面目な人は最初は我慢して食べなかったが、腹が減って仕方がないので、そのうち午前中の休み時間に食べるようになった。

昼食は担任の先生と一緒に食べていたが、弁当は午前中の休み時間に食べてしまっているのので、売店で「ポテト」を買ってきて、弁当箱^つに詰めてお昼時間に食べていた。「ポテト」は砂糖^{さとう}をつけた芋^{いも}のことで、「ポテト」というハイカラな名前^{なまえ}で五銭^{ごせん}で売られていた。

中学校^{ちゅうがっこう}に方言札^{ほうげんふだ}はなかった。標準語^{ひょうじゆんご}ができるのが当たり前だったので、みんな標準語で話していた。しかし同級生との会話では、たまにウチナーグチ(沖縄の言葉)が出た。人間だし、ウーマクー(腕白)でやんちゃな年頃なので、先生たちも咎^{とが}めなかった。

土曜日の授業が終わると、夕方4時～5時に首里を出て、大里村^{おおざとそん}(現 南城市) 大城^{おおしろ}を通過して玉城村^{たまぎらぼる}(現 南城市)の喜良原^{きらぼる}、仲村渠二区^{なかなだかりにく}(現 琉球ゴルフ倶楽部)、垣花^{かきのはな}を抜け、仲村渠一区^{なかなだかりいっく}の自宅まで歩いて帰った。家に着く頃には日が暮れていた。バスを利用する場合は佐敷^{さしき}(現 南城市)に出ないといけなかった。道が悪く、バスは車の轍^{わだち}を避けて通るので、佐敷から与那原^{よなぼる}(現 与那原町)まで1時間以上かかった。当時はお金(公金)がないので道の補修ができていなかった。

与那原から那覇までは軽便鉄道^{けいべんてつどう}が通っていたが、那覇から首里へ行くよりも、与那原から首里へ行く方が早かった。私は、軽便で那覇まで行く時間が無駄^{むだ}なので歩いていた。家へ帰る時にはもっぱら下駄^{げだ}を履いていた。

陣地構築^{じんちこうちく}

昭和18年(1943)には奉仕作業^{ほうしきぎょう}で農家の手伝いをした。大里村^{おおざとそん}(現 南城市) 湧稲国^{わきなぐに}の出征兵士^{しゅつせいへいし}の家に、農作業の手伝いに行った覚えがある。

昭和19年(1944)になると陣地構築の作業が始まった。アメリカ軍がサイパンやフィリピンへ上陸していたので、いずれ沖縄にも来るだろうということを一般の人達も感じていた。県外の学徒は軍の工場に動員されたが、私たちは陣地造りに動員された。昭和19年の8月頃までは授業があったが、それ以降は学校に行く代わりに、下宿から弁当を持ってそのまま陣地構築に行くようになった。

当初、アメリカ軍は港川^{みなとがわ}(現 八重瀬町) 辺りから上陸してくるという予想があったので、その想定で陣地が造られていた。私たち一中生は首里に学校があったので、識名^{しきな}から一日橋^{いちにちばし}(現 那覇市)

⁴ この裏付けとなる資料を事務局は確認できていないが、神谷さんの語りをそのまま掲載した。

までの間の陣地造りに何度も動員された。土を掘って盛る作業をしたが、港川方面である南側を高く盛った。

私たちは読谷^{よみたん}や嘉手納^{かてな}、小禄^{おろく}（現 那覇市）での飛行場造りにも動員された。読谷には一度か二度、小禄には何度も泊まり込みで行った。小禄村の大嶺^{おおみね}と瀬長^{せなが}は海を隔ててタンカーマンカーだった（向かい合っていた）ので、私たちは大嶺の方で、飛行場拡張のための埋め立てをするために砂運びをよくやった。

十・十空襲

十・十空襲があった昭和19年10月10日、朝ごはんを食べて学校に行こうとしていた時、米軍機が東の太平洋の方から低空^{ニシムイ}で西森の上を飛んできた。初めは日本軍の飛行機かと思った。突然飛行機が飛んできたので、空襲警報を鳴らす余裕はなかった⁵。最初は万歳^{ばんざい}をせんばかりに旗をあげて眺めていたが、しばらくして那覇やあちこちで煙があがっているのを見て、「これはアメリカ軍だよ」と慌^{あわ}てた。

下宿先は桃原農園^{とうばるのうえん}から2～3分の距離にあった。桃原農園の南側は高くなっていて、いろいろな木がたくさん生えているので陰^{かげ}になっていた。そこに行けば那覇の街を眼下に見渡すことができるし、（空襲のため）どこにも行けないのでそこに座って、那覇が燃えるのを眺めていた。道を歩く人は隠れながら歩いていたので、道路には見えなかった。午後の2時～3時頃になると、那覇の焼けた煙がずっと上まであがっていたので、太陽がまるでお月さまのように見えていた。太陽の光をさえぎるくらい煙がすごかった。

首里には攻撃がなかったが、悲しかったし、寂^{さび}しい気持ちにもなった。「このアメ公^{こう}は」という敵愾心^{てきがいしん}も出た。みんなそうだったんじゃないか。ただボーっと眺めるしかないという怒りの気持ちや悔しさもあった。

一中は首里にあったので空襲の被害はなかったものの、空襲後は授業どころではなかった。嘉手納^{かてな}辺り、北谷^{ちやたん}、宜野湾^{うらそえ}、浦添から車で通っている学生もいたが、空襲の被害のため、学校に行こうとしても行けない状態だった。先生方は那覇に住んでいたのだから焼け出されていた⁶。

学校が再開できなかったのも、私は玉城の家に帰った。家で過ごしていた頃には、現在の玉城青少年の家のある辺りから仲村渠までの地域の陣地構築などに参加した。その時も、敵は港川から来るという想定で陣地が造られていた。

私は、「（アメリカ軍は）本当に来るかな？」という気持ちを半分持ちながら、「来るだろうな」という思いも半分抱いていた。サイパンやフィリピンも上陸されたので、次は台湾^{たいわん}、沖縄と来るだろう、と考えていた。

⁵ 『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』によると、「米軍機は午前6時40分には那覇市の上空に到達し、市は午前7時に空襲警報を発令、サイレンや半鐘が鳴り響いた」という（沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』沖縄県教育委員会 2017 173頁）。ここでは神谷さんの語りをそのまま掲載した。

⁶ 神谷さんの語りをそのまま掲載したが、この「焼け出されていた」の意味は「空襲で住居を失い那覇に住めなくなった」ことであると考えられる。

けんちょうれんらくいん 県庁連絡員になる

10月10日の空襲以降、一中は休校になっていたが、昭和20年(1945)の1月半ば頃、玉城村役場へ登校命令が来た。親戚が役場にいたので、私の方へもすぐに連絡が来た。

当時、多くの沖縄県民が疎開のために県外や台湾へと送り出されていたが、ヤマト(本土)に行ることがなく疎開に不安を抱く県民が多かったため、県庁職員や市町村の役場職員が率先して疎開に行っていた。そのため沖縄県庁は人手不足となり、学校に応援を求めようになった。

一中から19人が県庁に派遣され、私もその1人であった。選ばれた理由はわからない。一高女(沖縄県立第一高等女学校)からも何人か派遣されて来た人がいたようだった⁷。他校の男子中学生はいなかった。

十・十空襲で県庁舎が焼失してしまったため、家主が疎開に行って無人となった民家(現在の那覇高校近く)が事務所として利用されていた。私はその事務所から、自転車に乗って安里や大道、松川(現那覇市)あたりに書類を届ける仕事などをした。県庁職員は、20~30人いるべき職場に10人もいないという状況だった。しょんぼりとして、無言でタバコを吸う職員もいた。市町村への連絡ができないので、仕事をしようにもできない状態だった。

アメリカ軍による沖縄への本格的な空襲が始まった3月23日ごろ、「県庁連絡員は全員集まれ」ということで、私たちは工芸(沖縄県立首里高等女学校)の壕のところにあった学務課の壕⁸に集まった。それから2日ほど、那覇の焼け残った倉庫にあった米を、夜中に荷車で首里の坂を運んでいった。当時県庁に勤めていた喜屋武真栄さん(戦後に参議院議員となった)も一緒に米運びをしていた。

てつけつきのうたいいん 鉄血勤皇隊員となる

学校から連絡があり、学務課長が「仕方ない」と私たちを学校に戻したのが4月4日の朝だった。私たちは一中鉄血勤皇隊の本部壕に向かった。一中の他の生徒たちは、3月末に鉄血勤皇隊として組織されて二等兵となり、兵隊として動いていた。

本部壕で「ただいま帰りました」と配属将校に報告すると、軍帽、軍服上下、脚絆、軍靴、三八式の銃を渡され、二等兵の星(階級章)もつけられて、二等兵と同じ格好になった。銃は重く、弾も100発支給されたので、銃と弾を合わせて重さが5、6キロ以上はあったと思う。弾は1発も撃たなかったし、撃つ機会もなかった。教練で実弾を使ったこともなかった。

アメリカ軍の銃は小さくて性能が高く、弾倉付きで何発でも続けて撃つことができる。日本の三八式の銃はこまめに弾を装填しなければならないので時間がかかった。その間にアメリカ兵は100発も撃つ。日本軍はなんだかんだ(言っても、そういう点で)負けていた。

一中では1学年4クラス、1クラスに生徒が56人いた。224人の同級生のうち、100人近くは疎開した。親が連れて行くといえば、学校は反対しなかった。県の方針としても疎開を推進していたし、

⁷この裏付けとなる資料を事務局は確認できていないが、神谷さんの語りをそのまま掲載した。

⁸首里高等女学校にあった地下洞窟のこと(沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』沖縄県教育委員会 2017 442頁)。なお前掲『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』では学務課ではなく「教学課」と表記されているが、ここでは神谷さんの語りをそのまま掲載した。

(疎開に行く人の^{あたまかず}頭数を1人でも増やしたいので疎開は黙認されていた。「(疎開に)行く」と言えば、学校で阻止することはできなかった。

残った120人くらいのうちの3割、40～50人くらいはやんばるや離島など遠いところの出身で、十・十空襲後、学校に戻って来られなかった。空襲の後に島に帰っていて、「(学校に)出てこい」と言われても船がない。当時、お金がものを言った。乗船には高いお金を払わなければいけなかった。お金がない人は船に乗れなかった。戦後、「それで命が助かった」と笑う人もいた。

とくべつはん 特別班として行動

県庁連絡員だった19人は後から鉄血勤皇隊に合流したので、特別班として行動することになった。特別班の任務としてあれもこれもやったが、そのなかには食料運搬^{しょくりょううばん}もあった。日本軍は持久戦^{じきゅうせん}の準備をしていたので、食料を確保するために、夜間に那覇の街の焼け残ったところからいろんな物資をトラックで運んできていた。私たちはそれを、首里の金城町^{きんじょう}から坂道を上って首里城^{しゅりじょう}まで運んだ。

鰹節^{かつおぶし}はバラで袋の中に入っていた。袋に少しでも穴が空いていれば、そこから取り出して食べた。大きいものも取り出せたので、運搬中に1、2本食べた隊員もいた。私は1本しか食べられなかった。食べてもばれることはなかったし、あの頃はご馳走^{ちそう}だった。幸い鰹節(の運搬)に当たったので、それでだいぶ元気になれたと思う。今でも鰹節を見ると、「よくもこれを1本平らげたものだ」と思い出す。戦後にその時の隊員らと集まった時も、「あの時の鰹節運びは楽しかったな、嬉しかったな」と言って笑い種^{ぐま}にしている。

特別班としていろんな作業をさせられるようになった後、4月下旬ごろから、私は壕^{かんつう}を貫通させる作業に割り当てられた。「西側と東側の壕を貫通させないと、入り口が1つしかなくて危ないから」ということで、一中の藤野校長先生の指揮のもと、5月14日の分散配置まで壕掘りに従事した。結局私たちは壕を貫通させることはできなかった。その後、その壕にはどこかの部隊が入ったらしいが、貫通させたという話は聞いていない¹⁰。一中生が分散配置された頃にはアメリカ軍がすでに(首里の)近くまで来ていて、浦添ようどれのところで攻防戦を展開していた¹¹ので、貫通させることはできなかったのではないか。

やせんじゅうほうへいだいいちれんたい 野戦重砲兵第一連隊へ分散配置

5月14日、それまで一中の鉄血勤皇隊としてまとまっていた隊員たちは各部隊に再編、分散配置された¹²。

⁹ なんじょうデジタルアーカイブで公開されている動画「戦争体験証言⑧ 神谷依信氏」(2004年収録)では、神谷さんは、物資を首里城下の司令部壕の入口まで運んだ、と語っている。

¹⁰ ここでは神谷さんの語りをそのまま掲載したが、「4月下旬に貫通させた」という証言もある(兼城一編『沖縄一中・鉄血勤皇隊の記録(上)』高文研 2000 211～212頁)。

¹¹ 浦添ようどれのある前田高地では、1945年4月25日から日米両軍による戦闘が始まり、5月6日にアメリカ軍が同地を制圧した。

¹² 5月14日、一中の鉄血勤皇隊は第五砲兵司令部の命により、勤皇隊本部、第五砲兵司令部、独立測地第一中隊、野戦重砲兵第一連隊、独立重砲兵第百大隊、独立工兵第六十六大隊の6つに再編され、翌日に各部隊へ分散配置された(公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館編集・発行『ひめゆり平和祈念資料館 資料集4「沖縄戦の全学徒隊」』2011[第2版] 51頁)。また、神谷さんによると「配属将校のもとで決められたのではないか」とのこと(大城牧子による聞き取り2017)。

そのうち、私を含む27人は野戦重砲兵第一連隊に配置された¹³。それまで、この部隊との面識はなかった。部隊には南風原村（現 南風原町）出身の防衛隊員が大勢いた。

部隊の壕は東風平村（現 八重瀬町）志多伯にあった。昼間はトンボ（アメリカ軍の偵察機）が飛んで危ないので、夜間にそこまで移動した。

私たちが壕に着いた時には、部隊の重砲は壕の中にあった。砲身はアメリカ軍の弾に当たったのだろうが、1メートル以上裂けていて使い物にならなかった。弾はとても重く4、5人で運んで載せた。弾を撃っている様子は見ていない。撃ったら撃ったで、100発どころではない、1000発以上いろいろな弾が飛んできただろう。

私が見た日本兵たちは、重砲が使えず仕事がないので寝てばかりいた。「自分たちは（戦闘）要員だから」といって、（戦闘以外の）仕事は防衛隊員と勤皇隊員にさせていた。防衛隊員は毎日の水くみ、食事、薪拾いなどをしていた。日本の兵隊は兵隊ではなくなっていた。

連隊の診療室があったので、その手伝いもした。診療室では毎日のように患者が十数人運ばれてきた。朝も夜も7～8人、一日で14～15人は死んでいった。一中の生徒は死体の片付けもした¹⁴。4人で遺体一体を持って埋めるところに運び、穴を掘った。土が硬いところを掘る体力はなかった。艦砲射撃を受けて土が柔らかくなったところや、艦砲の弾が落ちた跡を利用していった。

野戦重砲兵部隊なので、敵のすぐ目の前のところに観測所があり、観測所から重砲のあるところへ「あと何百メートル」と電話で連絡をしていた。観測所の役割は大きく、（敵が）100メートルくらいまで近づいて来たら撤退すると聞いた。

真壁へ撤退

私は先遣隊として5月22日に志多伯から摩文仁（現 糸満市）¹⁵へ行った。部隊は5月下旬から6月1日頃に真壁（現 糸満市）へ撤退したと、他の勤皇隊員から聞いている。真壁では志多伯の壕にあった壊れた重砲を見なかった。重砲は志多伯に置いて来ていたのではないか。

真壁では民間人が避難していたガマ（自然壕）から彼らを追い出した後、壕として使った。ガマには服などいろんなものが置いてあった。

真壁に来てからは、毎日出る戦死者の埋葬をするのが大変だった。診療室も真壁に移動してきていた。

また、アメリカの迫撃砲で与座岳（現 糸満市）の観測所までの電話線が切れて通信不能になることがあったので、電線がどこで切れているかを調べたり、補修したりしたが、これが一番怖かった。電線は畑の上を通っている。隠れるところがなかった。与座岳に行くときには新垣（現 糸満市）の集落を通り、坂道を伝っていった。

¹³ 野戦重砲兵第一連隊に配属された一中生の人数は、神谷さんと同じく27人だとする説（那覇市企画部市史編集室編集・発行『那覇市史 資料篇 第3巻7 市民の戦時・戦後体験記1（戦時篇）』1981 313～314頁）と、25人だとする説（兼城一編『沖縄一中・鉄血勤皇隊の記録（下）』高文研 2005 353～354頁）がある。

¹⁴ 前掲の動画「戦争体験証言¹⁸ 神谷依信氏」と玉城村史編集委員会編『玉城村史 第6巻 戦時記録編』（玉城村役場 2004）収録の神谷さんの証言（同書256～262頁）では、遺体埋葬は真壁に移動した後の出来事として語られているが、ここでは聞き取り時（2017年）の神谷さんの語りをそのまま掲載した。

¹⁵ 神谷さんの語りをそのまま掲載したが、真壁の言い間違いである可能性がある。

ある日、任務を終えたあと、与座岳^{ちゅうふく}の中腹あたりで至近弾^{しきんだん}をくらって逃げた。慌^{あわ}てて隠れたのがソテツの陰だった。ソテツは弾^{たま}よけにはならないけれど、濡れる者は藁^{おぼ}をも掴^{わら}む心境でソテツのそばに隠れた。近くに煙があがっているのを見ると、迫撃砲のとても大きな破片が飛んできていて、近くの草むらが燃えていた。私たちは至近弾の下にいたから助かったのかもしれない。弾から遠い場所にいると飛び散った破片を受けていたかもしれない。私は無傷で、兵隊も友達も誰もケガをしていなかった。「何の役にも立たない（と思っていた）ソテツに助けられたなあ」と笑った。

自決^{じけつ}を試みる^{こころ}

6月19日の夜、野戦重砲兵第一連隊は斬り込み^{きこみ}のために3つの隊に編成され、隊ごとに壕を出た¹⁶。

野戦重砲兵第一連隊に配属された一中生のうち、この日までに1人は亡くなっていたが、私を含め26人は生きていた。しかし、20日、21日の2日間で13人が亡くなっている。この短期間でこれだけの犠牲^{ぎせい}を生む方法を取ったことは、なんととっても軍の責任だと思う。

私が配属された隊は、軍の兵隊6人、一中生12人、防衛隊も入れて50～60人くらいで斬り込みに出た¹⁷。しかし兵隊たちは、壕から出て、米須^{こめす}（現 糸満市）の集落が見えるワイトウイ（岩の切り通しの道）のところで逃げてしまった¹⁸。彼らは北部に行って徹底抗戦^{てっぺいこうせん}するのだと言っていた。

夜も明けるから早く壕を探さないと大変だということで、5、6人くらいしか入らないような小さな壕に一中生12人がぎゅうぎゅう詰めに入った。

午後2時頃、アメリカ兵が来ているのが見えた。それから手りゅう弾を2発投げ込まれ、3人が即死^{そくし}し、1人がケガを負った。5、6人だけで入っていたら死んでしまうところを、（12人いたことで）入り口にいた3人が弾をくい止め、その奥のほうはみんな助かった。

午後3時、4時頃、「もうダメだ」と、1人がどうするか（自決の覚悟を決めるか）と提案した。みんな覚悟を決めると賛成^{さんせい}し、思い出にタバコでも吸おうということになった。タバコは天皇陛下からの恩賜^{おんし}のタバコだった。学生なのでタバコは本来は禁止されていたのだろうが、先生たちが「恩賜のタバコ」だとして配っていたので、黙認されていたのだろう。タバコを吸うウーマクー（腕白）がいたので火はあった。

死のうと覚悟を決めて、今生^{こんじょう}の思い出にタバコを吸ったが、初めてなので吸えなかった。咳き込んで顔が真っ赤になっている人もいて、おかしくてみんなで腹の底から笑った。笑い声が出たので、アメリカ兵が来ようがへっちゃらだという気持ちになった。おかげで、暗いジメジメした気持ちから晴れやかな気持ちになった。自決しようと決めた時より朗^{ほが}らかになり、死ぬ前の思い出ができたと思った。

斬り込みに出発する2時間前に、1人2発ずつ、缶詰^{かんづめ}に入った手製^{てせい}の手りゅう弾をもらっていた。

¹⁶ 前掲『玉城村史 第6巻 戦時記録編』に収録されている神谷さんの証言によると、この日に多数のアメリカ軍の戦車が東に向かって進撃しているという情報を受け、部隊は夜に斬り込みをかけることを決定し、3隊に分かれて壕を出たという（同書259頁）。

¹⁷ 前掲の動画「戦争体験証言⑧ 神谷依信氏」では、神谷さんは兵隊が3、4人、斬り込みに出た人数は全体で250～260人いたのではないかと述べている。また、前掲『玉城村史 第6巻 戦時記録編』では、神谷さんは兵隊が5人、一中生は11人と述べているが（同書259頁）、ここでは2017年時点の聞き取りでお話しされていた人数を掲載した。

¹⁸ このとき、上等兵が解散命令を出したという（前掲『玉城村史 第6巻 戦時記録編』259頁）。

「1・2・3」と掛け声をして信管を抜いたが、1つも爆発しなかった。人の運というのは不思議なもの。死にたくないと思う人達は死んでしまうのに、こっちは死のうとしても死ねない。

摩文仁へ向かう

その後、12人中3人は亡くなってしまっていたので、残った9人で一緒に摩文仁に出ようと相談し、摩文仁の崖の下の海岸へ避難した。食料を探さないといけなかったが、(ひとまず)摩文仁の海岸線に出たら水はたくさんあるから、というのが理由だった。

私は小学校5、6年生の時に遠足で2回糸満に行ったことがあった。当時の担任が高嶺・大里(現糸満市)出身の山城という先生で、この先生のクラスだけ、米須、小波蔵(現糸満市)を通過して糸満に遠足をしたので、(私には糸満の)土地勘があった。また、米須に自分の親戚もいて、小学校2年か3年の頃に葬式に行った記憶もあった。

ケガをしていた子は真玉橋(現豊見城市)出身で、タバコを吸っていた照屋君は北谷出身だった。2人は途中ではぐれたが、彼らは土地勘がなかったせいではぐれてしまったのではないか。他にも数人が途中でいなくなってしまう、摩文仁のワイトウェイ(岩の切り通しの道)を越えて、海岸まで行ったときには4人になっていた。私以外の3人は、歩いてギーザバンタから港川(現八重瀬町)に抜けていこうと相談していた。私は親も防衛隊に出ているし、いとも勤皇隊でケガをしていると聞いていたので「ここで待つ」と告げ、1人だけ残った。

捕虜になる

その後、出会った人たちと8人でグループをつくり、安里(現八重瀬町)辺りのゴルフ場のところまで斬り込みに行ったが、アメリカ兵がいなかったので戻った。ちょうど現在の平和の礎の東側、外国人の名前が刻銘されている礎がある辺りの海が見えるところに、井戸のように下に深くなった自然壕のようなものがあり、ハシゴがかかっていたのでそこを降りて、元の場所に帰った。

19日の晩から食事をしていなかったの、翌日から2、3人一組になって食べ物探しに出た。雑囊(肩からかける布製のカバン)を枕にして戦死している人がいたので、手を合わせておわびをし、雑囊を開けると乾麺包があった。喜んだが、カビが生えていた。それを潮水で洗って食べたが、その3、4日後、屋嘉(現金武町)に連れて行かれていた頃に下痢をした。ひどい目に遭った。

斬り込みに行った2、3日後、アメリカ軍の搜索隊が来た。私と一緒にいた兵隊たちの中に、陸軍の野戦重砲何連隊か、そこの副官をしていたというワタナベという人¹⁹がいて、その人に「君たちは日本の国を立て直す大きな使命があるから、生き残って国のために尽くしなさい」と言われた。「今さら国のために」と思ったが、「子孫のためにも、新しい日本のためにもぜひ生き残りなさい」と説得された。ワタナベ中尉と下士官2人(曹長か軍曹だったと思う)は50歳近い人達だったので、「自分たちは出ない。若い者は早く出て行け」と、僕らを説得して壕から出した。

海岸に出て、潮水があるところまで移動して2、3人で手を洗っていたら、ドカーンと爆発音が

¹⁹ 前掲の動画「戦争体験証言⑧ 神谷依信氏」では、「第一連隊の副官というワタナベと言う方だった」、「名古屋の方とか言っていた」と語られている。

あがった。私たちが説得した3人は自決していた。

その後、私は現在の平和の礎があるところの東側から歩き、韓国人慰霊塔が建っているあたりに停まっていたGMC（アメリカ軍のトラック）に乗せられた。GMCには20人以上は乗っていたのではないかと。兵隊が多かったように思う。

ハワイ・サンフランシスコへ送られる

摩文仁から玉城村仲村渠二区（現 琉球ゴルフ倶楽部）の上江洲口東側の広場まで連れていかれ、そこで降ろされた。午前11時を過ぎていた頃だと思う。そこでCレーションかKレーションを1個ずつ支給されて昼食を取った。自分の故郷^{ふるさと}なので、自宅の畑も見えた。草がポーポーと生えているので境はわからなかったが、「あの近辺だ」というのはわかった。

上江洲口で1時間くらい休んだ後、屋嘉^{やか}（現金武町）に連れて行かれた。屋嘉で10日ほどいたと思うが、その間に尋問^{じんもん}はされなかった。その後、ハワイに連れて行かれた。

沖縄からハワイへ連れて行かれた捕虜^{ほりよ}は3000人ぐらいだったと聞いている。私がなぜその中に選ばれたのか、どういう目的があったのかはわからない。アメリカ軍の言われるがまま連れて行かれた。

北谷の飛行場（当時の北谷村には現在の嘉手納町域も含まれていた）の滑走路^{かっそうろ}の片方の先端が海に面していたので、その辺りだったと思うが、そこからアメリカの輸送船に乗せられた。輸送船といっても軍用の荷物を運ぶ船で、その船倉^{せんそう}に押し込められた。窓はなかった。

船内では自然と情報が流れてきて、船がハワイに行くらしいということを聞いた。ハワイに着くまで約2週間かかり、ハワイに滞在したのも2週間ほどだったと思う。その後、サンフランシスコに連れて行かれた。

ちょうど、ハワイからサンフランシスコに行く船の中で8月15日を迎えた。アメリカ兵はどんちゃん騒ぎ^{さわぎ}をし、鉄砲^{てっぽう}を撃ちまくっていた。何かあったのかと思っていたが、日本が負けて彼らが喜んでいるということが伝わってきた。

のちに私も、東條英機^{とうじょうひでき}（元首相）が拳銃自殺^{はか}を凶って倒れている様子^{このえふみまろ}²⁰や、近衛文麿^{このえふみまろ}（元首相）が毒薬を飲んで自殺した様子を電子写真^{でんし}で見、（日本が）本当に負けたんだと受け止めた。アメリカはその当時から発達^{はくたつ}して日本とは違った。これ（アメリカ）と戦^{いくさ}するとはヒルマサヌ（なぜ、不思議だ）、という気持ちになった。

ハワイから連れてこられた捕虜たちは、old組（年配者）とyoung組（若者）に分けられていた。私たち18歳未満はyoung manやbabyと呼ばれていた。私は詳しい人数を知らないが、old組は100人、young組は200人いたと聞いたことがある。

サンフランシスコには8月末頃に着いたのではないかと。そこではアメリカ兵部隊がいた跡地（広場もあった）に収容され、軍作業をするわけでもなく、ご飯を食べて遊んで暮らしていた。暇^{ひま}だからと言ってベッドにこもって寝ようとしたら、二世^{にせい}（日系二世のアメリカ兵）がまわってきて「体

²⁰ 神前掲の動画「戦争体験証言⑧ 神谷依信氏」では、新聞に掲載されていた、東條英機が病床に伏している写真をサンフランシスコに向かう船の中で見た、と語られている。

を壊すからだめだ、外に出て運動をしろ」と怒鳴り、全然寝かせてくれなかった。

沖縄へ帰る

サンフランシスコでは3ヵ月弱ほど過ごし、その年の12月半ば頃に沖縄に帰ってきたと思う²¹。サンフランシスコからは、ウェーク島^{とう}や北大東島のそばを^と通ってまっすぐ沖縄に帰ってきた²²。沖縄ではインヌミ屋取^{ヤードウイ}に着き、そこから家に帰った。

仲村渠では、集落の上の方にはアメリカ兵が大勢いた。住民は公民館から上の方には入れず、百名に近い地域に入っていた。

私の家族は、仲村渠樋川^{ヒージャー}の上の方に張られた大きなテントに入っていた。おそらく20世帯くらい入っていて、そのうち14、5世帯くらいが糸数^{いとかず}の人たちだったと思う。糸数^{いとかず}の人たちは、私が帰って来て1週間もしないうちに糸数^{いとかず}に引き揚げていった。

家に帰ると父は戦死し、弟と妹の2人も亡くなっていた。聞く家庭、聞く家庭みんな、「あの人も死んだ、この人も死んだ」と、死人^{しにん}ばかりが数えられる状態だった。普通の状態ではなかったので、帰っても嬉しいとも思わなかったし、喜んでくれる人もいなかった。みんな自分のことで精一杯で、「帰ってきたか」というくらいだった。

家族のうち、母と弟妹3人が生き残っていた。

(大城牧子による聞き取り 2017)

²¹ 前掲の動画「戦争体験証言⑱ 神谷依信氏」では、11月末頃に屋嘉に着き、屋嘉で1週間ほど過ごして玉城に帰った、と語られている。

²² 前掲の動画「戦争体験証言⑱ 神谷依信氏」では、ケゼリン島で1泊し中城湾に着いたが、久高島沖で34日間、船で待たされた後に上陸した、と語られている。

弟と一緒に学童疎開

私は玉城国民学校高等科（現在の玉城小学校の前身）1年生の時、2つ年下の弟と一緒に学童疎開で熊本県に行った。はじめは対馬丸に乘せられたが、「那覇の人が乗るから降りて」といわれ、別の船に乗った。船は鹿児島に着き、そこから汽車で熊本の日奈久（現 八代市日奈久町）へ行った。日奈久では、玉城の学童たちは嶋屋という旅館に宿泊していた。

のちに、玉城の学童たちは山奥にある上松求麻村（現 八代市）に再疎開をすることになった。日奈久からの移動の時には川を船で渡り、そこから歩いて行った。新しく通うことになった学校は第2国民学校（のちの中津道小学校で、現在は八竜小学校に統合されている）で、寝泊まりも学校ですることになった。

その後、食料の確保が難しくなり、何人かの学童は地元の農家に預けられることになった。私と弟は梅田家にお世話になった。梅田家には父（一衛）、母（ツギエ）、長男の洋一郎（当時3歳）と次男の隆（当時1歳）がいた。

2016年、沖縄の川平家に梅田洋一郎・隆兄弟が訪れる

◎チヨさんと梅田家との思い出

洋一郎 私たちは父親から、「チヨさんが子守をしてくれた。おんぶをしたりおむつを替えたりしてくれていたよ」といつも聞かされていた。

隆 私は1歳だったので当時のことは覚えていないが、父からチヨさんのことは聞いていた。今日初めてチヨさんの家を訪れることができた。

チヨ ご飯には困らなかったけど、供出があるのでお米を馬小屋の天井に隠していた。しかし、取られてしまったこともあった。

洋一郎 あの時はみんな食べるのに必死だった。

◎梅田家での仕事

チヨ 梅田家では2人の子守や家事、畑のお手伝いをしていた。梅田家ではお米や芋、大根を栽培していて馬も2頭いた。冬になると芋を土の中に埋めてその上に藁を敷き、天然の冷蔵庫にして保存していた。冬は雪が降ってとても寒かった。

洋一郎 冬は囲炉裏で体を温めていた。

◎川平家と梅田家の交流

洋一郎 川平さんの次男の卒業式があり、その時川平さん達が熊本に来ていたことから（梅田家と再会し）そこから交流が始まった。中津道小学校に連れて行ったこともある。

川平さんから「熊本の球磨川石を庭石に使いたいので探してくれないか」と連絡があり、探したことがある。良い石が（いくつ）あったので、川平さんと業者さんを連れて一緒に見に行った。川平さんも気に入ってくれたので、その場で石にペンキを塗って購入した。

川平賀清（チヨさんの夫） 購入した石は中庭と家の外の方に置いた。とても大きいので、業者の人に「これらの石はゴルフ場か何かで使うんですか」と聞かれた。

（事務局による聞き取り 2016）



学童疎開先の熊本県から、梅田家が川平家を訪れた際に撮影した集合写真（2016年1月24日）

ペルーから沖縄へ帰る

私は両親の移民先だったペルー首都リマのサンタ・ロサで生まれ育った。私が小学校3年生だった1939年（昭和14）に、家族で沖縄に帰ってきた。

ペルーから日本に来る時、船がアメリカのどこかに寄港した¹。アメリカに移民していた母のきょうだいが会いに来ていたが、日本人は船から降ろしてもらえなかった。その時、船からアメリカの大きな軍艦が4、5隻見えた²。

沖縄に帰って来て、家（屋号 ジルーキシャバグワー）を建てるまでは、仲村渠二区（現 琉球ゴルフ倶楽部）にある母の実家（屋号アガタンメー）で生活した。私はスペイン語・日本語・ウチナーグチの3つの言葉を話すことができた。沖縄に来てからは、学校でよそ者だといじめられて毎日けんかをしていたが、革靴を壊してしまうくらいやんちゃだったため、だんだん周りの児童がおとなしくなっていた。

日本軍の駐屯と慰安所

仲村渠二区にも日本軍が駐屯し、私の家には日本軍の大隊長やムラカミ中尉が宿泊していた。部隊名や大隊長の名前は覚えていない。八重山か宮古島出身の准尉（ハラさんという名前で食料か何かの係だった）もいて、この人は当時開南中学校の3年生だった兄と仲が良かった。

仲村渠二区には慰安所も設置されていて、女性が10人ほどいたと思う。慰安所に兵隊が並んでいるのを見たことがある。「慰安婦」のことをみんなは「朝鮮ピー」と呼んでいた。私は彼女たちの名称がそうなのだと思っており、からかう気はなかった。

かなわなかった師範学校への進学

私はもともと少年兵になることを志願していて戦車兵になりたかったが、体が小さすぎると言われ、師範学校に進路を変更した。昭和20年（1945）の2月頃に師範学校を受験したと思うが、受験の時、那覇を空襲した際に捕虜として捕まったアメリカ兵が師範学校の入口にいた。師範学校にも軍が駐屯していたが、受験は1階の講堂で行われた。

その後、合格が決まって4月7日の入学予定となったが、沖縄戦が始まったため進学はかなわなかった。

¹ 喜舎場さんによると、サンフランシスコからサンゼルスか、はっきりしないとのこと（事務局による聞き取り 2023）。

² 喜舎場さんによると、「トウシビー祝いでハワイ旅行に行った際、軍艦アリゾナのポールを見て、あの時見た軍艦はアリゾナだったんだと思った。」とのことである（事務局による聞き取り 2023）。

ガマでの避難生活

1945年の3月20日頃、玉城城跡のあたりに弾が落ちた。その様子を見ていたら、「これは戦だよ^{イクサ}」と言われてティーラガマに避難した。近くにクラガマ、シムクラガマなどがあり、仲村渠二区の住民が避難していた。どのガマ（自然壕）を使うかについては指定されていなかったもので、世帯単位で、各自で行きたいガマに避難していた。私たちは家族で、ティーラガマの向かいにあったガマ（名前不明）に避難した。

上江洲口^{イージグチ}のウフニク原^{ふもと}の山の麓には馬小屋があり、軍馬がいたが、ある日グラマン（アメリカ軍の戦闘機）の機銃で馬が攻撃された。日本兵は住民に馬肉を取ることを許可し、取った後には残った部分を埋めさせていた。私たちも芋を炊くときに上に馬肉をのせ、ンブシー（味噌煮）にしてたくさん食べた。当時ではごちそうだった。

早朝と夕方のおのおの1時間は、艦砲射撃^{かんぼうしゃげき}が止んだ。海を見ると、アメリカ軍は勤務交代をしているようだった。私たちはその間を見計らって食事などをしていた。

上江洲口は早い時期にアメリカ軍に焼かれ、家も、木の下に置いてあった着物なども全部焼けてしまっ大変だった³。避難中に一度、グラマンに追われたこともある。

アメリカ軍のトンボグワー（偵察機）からまかれた宣伝ビラには、「知念に逃げなさい、そこでは民間人を収容します」と書かれていた。それを手に取って読んでいたため、スパイだとされて日本兵に銃殺された人が1人いた。そのため、宣伝ビラを持っていても隠していた。

義勇隊^{ぎゆうたい}への動員

ティーラガマに避難していたとき、ガマの真向かいで義勇隊の召集を受けた。男性が数人（日本兵ではない）やってきて、「15歳以上は義勇隊に出なさい」と呼びかけた。仲村渠二区から20人ほど、男性のみが義勇隊として召集された。私は14歳で身長が145センチメートルくらいだったが、数えで15歳ということで動員された。

今考えると糸数城跡だったと思うが、そこが日本軍の陣地として利用されていた。玉城村（現南城市）の義勇隊員はそこに集められた。村内の別の字からも人々が集まっていたので、相当な人数がいた。私たちはそこに布陣していた部隊（部隊名は忘れてしまった）に配属され、後方支援をするという感じだった。

隊員は、点呼をとられた後に5人ずつの班に編成された。各班に日本兵1人がつき、その日本兵の指示の下、班ごとに部隊の後方支援をすることになっていた。軍服や、軍属^{ぐんぞく}であることを示すワッペン等の支給はなく、みんな私服で作業をした。また義勇隊員には、敵を殺すためと自決をするための2個の手りゅう弾^{しゅ}が支給された。義勇隊の活動は主に夜で、昼間は家族のいる壕^{ごう}に帰っていた。

家族のもとへ帰してくれた新垣先生

隊員の点呼をとっていたのは、南風原村^{はえばる}（現南風原町）与那覇出身の新垣コウゼンという方だっ

³『玉城村史 第6巻 戦時記録編』293頁によると、1945年4月中旬ごろに、アメリカ軍の偵察機一機が撃墜されて炎上した。その報復攻撃として、アメリカ軍が上空から焼夷弾を落とし、与那川屋取（上江洲口）の42世帯中38世帯の家屋が、家畜もろ共に炎上、消滅してしまったという。

た。彼は当時 30 歳前後の海軍帰りの在郷軍人^{ざいこうぐんじん}で、私の母の実家（いとこの儀間昇の家でもある）に下宿しながら学校の先生をしていた。

新垣先生は点呼をとった後、5 人の班に分ける前に、私と同級生である山入端宏正さんの 2 人にこっそり帰るよう指示したことが何度かあった。4、5 回点呼をとったが、そのうち 3、4 回は帰されたのではないか。私たちが幼かっただけでなく、母の家にお世話になっていたということもあり、家に帰してくれたのだろう。新垣先生は命の恩人だ。

命がけの弾薬運び

弾薬運びは夜間に行った。また、戦闘の第一線に行っていたため、どこに運んだのかは憶えていない。しかし今の地形を見ると、浦添城跡まで行ったことは分かる。当時アメリカ軍は真栄原^{まえばら}（現宜野湾市）まで来ていた。

初めて動員されたとき、ある下士官^{かしかん}に「生きて帰りたければ、負傷兵が『助けてくれ』と言っても絶対にその兵を触るな。あんたも一緒に死にたければ触りなさい」と言われ、実際に負傷兵を避けて移動した。その下士官は首里に行く途中、識名園あたりで砲弾の破片に当たり亡くなってしまった。彼がそこにいなければ、自分達がやられていたかもしれない。

最初に弾薬を運んだ時、繁多川（現那覇市）の山の上にある御願所^{ウガンジョ}の壕^{こう}で 1 泊することになった。夜になり壕から外に出ようとすると、アメリカ軍は電波探知機を持っていたらしく、迫撃砲^{はくげきほう}で攻撃してきた。まとまって移動すると危険だということで、集合場所を決めて、1 人ずつゆっくり出て行った。

その夜、首里崎山の御茶屋御殿^{ウチャヤウドン}あたりで艦砲射撃^{かんぼうしゃげき}を受けた。そのときは新垣先生、愛地（現南城市）出身の男性、その男性の父親と一緒にいたが、しゃがんでいた時に、「んん！」という声が出た。愛地出身の男性の頭に破片が当たり、即死してしまっていた。そのときの彼の父親はとても可哀想だった。大里村（現南城市）の真境名^{まじきな}付近では、1 期上の先輩が艦砲射撃の破片に当たって亡くなった。他の人たちは伏せて助かった。

ある日、私と山入端さんは一緒に弾運びを終えて、玉城村役場の裏の山にあった部隊の壕に戻った。すると、壕には逃げてきた兵隊が入っていて、私たちに剣を向けて「スパイか？スパイか？」と言ってきたので、2 人で逃げた。このようなことが 2 回あった。当時の日本兵は怖かった。

また、弾運びの帰りに集落の製糖工場に来た時、そこである日本兵に出会い、彼から「ここはあんたがたの住んでいるところだから自分で守らないといかんよ」と言われた。日本兵たちは、沖縄に駐屯してきた頃には、「自分らは沖縄を守りに来ました」と言っていたので、この製糖工場で出会った兵隊にとってもワジワジーした（腹が立った）が、彼は鉄砲を持っていたのでそのまま逃げた。なお、日本兵たちは、駐屯してきた頃、「絶対に捕虜^{ほりょ}にはなるな。捕虜になるなら自ら鉄砲^{てっぽう}で頭を撃て。手が引き金に届かないから足の指を使え」とも言っていた。

任務が終わり、山入端さんと、2 歳ほど年上の諸見里アンセイさんと 3 人でシマ（集落）に帰ったが、壕には誰もいなかった。諸見里さんは私と山入端さんの 2 人に、「自分は島尻（沖縄島南部）に戦いに行くから、あんたたちは家族の元へ帰りなさい」と言った。そして持っていた手りゅう弾

2個を取り出し、「付いてきたらこれでお前たちを攻撃するからな」と言って、1人で島尻へ行ってしまった。彼は当時農林学校の学生で、軍国教育を受けていたので、1人で島尻まで戦いに行ったのだと思う。彼は戦場を生き延びたが、島尻では大変な思いをしたようだ。

アメリカ兵に手を振って山を下りる

義勇隊から離れて、家族が避難していた上江洲口^{イージグチ}の馬場の裏側の壕に移動した。ある時、こちらからの距離が約100メートルというところまでアメリカ人（アメリカ兵）が来ていた。第一線だというのに、アメリカ兵はタバコを吸うために銃をかまえることもせず、のんびりとしていた。その時、彼の真向かいにいたある先生がアメリカ兵に向かって銃を撃った。すると、そこに向かってアメリカ軍が反撃した。私たち家族は南部に避難することにし、その壕を出て、普段なら30分から1時間しかかからない道を一晩かけて山に移動した。

そして、その時、父が「重いでしょう」と言って、私がいつも胸に持っていた手りゅう弾を取って隠した。その後、私たちの近くをアメリカ兵が通りかかったので、私の方から「おいで、おいで」と招くように手を振ると、「Come on, come on」と言われたので、一緒にいた4世帯くらい（屋号ヒガノソバヤ、イナフクグラー、残り不明）は、（山を）下りて行って捕虜となった。当時の日本兵は怖かったが、アメリカ兵を見たら安心したので出て行った。手りゅう弾を隠してきたのは良かったと思う。

収容所^{しゅうようじょ}での生活

捕虜になり、最初は下田^{シムダ}（現 南城市）の収容所に入った。アメリカ兵はチョコレートやチューインガム、キャラメルなどのお菓子を持って来てくれた。みんなは外国の食べ物を見たことがないため、「毒が入っているから食べたらダメだよ」と言っていたが、私はそれらのお菓子をペルーで食べたことがあったため気にせず食べていた。

その後、チーズなどアメリカ軍からの配給品が来ると、みんな私のもとに「これは何ですか？何と読むんですか？」とよく聞きにくるようになった。スペイン語と英語のスペルには似ているところがあるので、英語も少しは意味が分かった。アメリカ兵の中にスペイン語を話せる人がいて、この人からはお菓子をたくさんもらった。

また、現在の琉球ゴルフクラブにあった収容所の中を歩いていた時（私は裸足^{はだし}だったので、靴がないか探しに行っていた）、金網の中に日本兵たちが閉じ込められていた。その中に「絶対に捕虜になるな、捕虜になる前に自決しろ」と私たちに言っていた兵隊がいた。そう言ったのは洗脳されていたからだと思える。後に、私は、やはり「命は大切に」ということが分かるようになった。

下田の収容所^{おやげぼる}の次に親慶原^{とうき}、そしてやんばるの東喜^{ふたみ}（現 名護市二見）の谷底へと移動させられた。東喜にはPW（戦争捕虜）もいた。食料を探しに西側の宇茂佐^{うもさ}（現 名護市）あたりまで行ったことがあったが、そこにはアメリカ軍のトンボグラーの飛行場があった。

東喜で私は、マラリア^{かか}に罹って体が弱り、下り道を歩くときには体がガタガタしてきつかった。

その後、玉城^{ふさと}の富里へ移動した。仲村渠二区にはアメリカ軍が入っていたため、帰る場所は無く

なっていた。富里で生活していた時には、^{こちんだ}東風平の^{ともり}富盛（現 八重瀬町）まで芋を掘りに行くのが大変だった。1人ひとり決められた分の芋を掘って出せば、それ以上に採れた芋は自分のもののできたので、上等な芋を自分用に残していた。^{つる}蔓が多く生えているところには、たいてい遺体が埋まっていた。

戦後は不発弾もたくさん残っていた。子どもなので面白半分でガマに遊びに行っていた。あるガマには^{てきだんとう}擲弾筒の弾が山積みになっていた。中に入れないので弾を1つ1つどかして入った。

進学を諦めて自学した戦後

終戦後、玉城に青年実業学校（ディストリカルハイスクールと呼ばれていた）という学校ができたが、その先生は戦前にも教員をしていて、国のために死ぬことを称賛していた人だった。そのため「『国のため』と言っていたのに、先生はなぜ生きているのか？」と生徒らに言われ、授業にならなかった。その後も授業どころではなく、学校はまもなく廃校になった。

また、戦前に師範学校生だった人たちは、知念高校などのハイスクールの2年生に編入することができた。私も対象者だったが、戦争で母と兄を亡くし父と2人家族になったので進学を^{あきら}諦め、家のために働くことにした。朝には同級生たちが「学校（知念高校）に行こう」と家まで呼びに来ていたので、近くの山に逃げて隠れ、彼らが行ったのを見て下りていた。

戦後、私は那覇の壺屋にあるヤミ市場で本を買って自学で勉強した。また、那覇の港のトゥンドービヨ（港での船の積み荷下ろし）で働いていた時には、^{おうのやま}奥武山公園のキャンプにあったテントで寝泊まりし、週に一度の休日に玉城に帰った。その後、軍政府に就職し、エンジニアや消防署（佐敷のバックナービルにあった）の仕事に就いて働いた。それからはバスの運転手、建築業（トラック運転手）、ガス関係の仕事をし、定年後もガソリンスタンドや建築業、浦添市のシルバー人材センターなどで、70歳まで働いた。

（井口学と事務局による聞き取り 2018
事務局による聞き取り 2023）

戦前の百名

百名部落は農耕者の集落で、サトウキビやイモ、稲がつくられていた。昭和14年(1939)頃は木炭バスが大里村(現 南城市)稲嶺から百名まで運行していた。この地は、沖縄における「稲作の始まりの地」ともいわれていた。沖縄戦の始まる前から大城医院(医師は大城幸隆氏。大城幸之一病院の分院)があった。

百名に駐屯した吉田分隊

沖縄戦の前にはたくさんの兵隊が百名に駐屯したが、その中でも先遣隊として最初に百名に来たのは吉田分隊(第9師団。12～13名)だった。吉田分隊が来たのは昭和19年(1944)、県外への疎開が始まる前の頃で、〈大前〉¹の家に駐屯していた。私は吉田分隊が来た時に初めて、「兵隊とはこういうものなのだ」と知った。そして、(軍が地域住民のために)演芸会のようなものが開かれたのだが、その時初めて芝居というものを観た。兵隊と地域の人達が交流することもあり、特に子ども達との交流が盛んだった。兵隊達は自分の家族や子ども達のことを思い出していたようだった。

吉田分隊は知念方面、久高方面に向けた砲台や、壕などの陣地を構築していた。壕は100～150メートルほどの長さで、松の木で枠を造っていた。大きな壕なので完成するのにずいぶん時間がかかった。子どもたち(国民学校3年生くらいから上)も動員された。壕を掘る時に出た土をバーキグラー(ざる)に入れ、それを20～30人で手渡しして運び出す作業をした。意味は分かっていたが楽しんでやっていた。

陣地構築の現場には時々、軍の自動車が視察に来ていた。自動車に立てられている旗の色が、日によって黄色だったり赤だったり違うので、兵隊に理由を聞くと、乗っている人の階級によって色が変わるとのことだった。自分自身が子どもだったからかもしれないが、兵隊は聞けば何でも教えてくれた。

当時は、お医者さんでも往診のために馬で移動していた時代で、自動車を見たのはそれが初めてだった。私が国民学校1年生ぐらいの時には木炭バスがあったが、いつの間にか姿を見ることがなくなった。冬には木炭バスのエンジンがかからなくなる時があった。バスを押すとエンジンがかかるので、子どもたちは「バスを押したら乗せてあげる」と言われ、みんなで押しに行った。しかし乗れたのは上級生だけで、下級生は教科書を入れた風呂敷を持ちながら歩いて行くしかなかった。ちなみに当時、ラジオは富里の大城幸之一病院にあった。「ラジオという箱グラーから声がする、中に人が入っているみたいよ」と話していた。

¹ 大前は屋号。本稿では、屋号は〈 〉で括弧で表記する。

玉城に駐屯した日本軍

後に、先遣隊の吉田分隊以外の日本軍の部隊が、百名を含めた村の各地に駐屯するようになった。住人が県外に疎開して空き家になった家なども兵隊の宿舎となったほか、玉城国民学校にも大隊本部が置かれた。大隊長はイイダという名前の若い人で、その人が日本刀を下げ、馬に乗って歩くのを見て「あんな偉い人になってみたい」と、うらやましく思った。

学校が兵舎となってしまったため、子どもたちは上江洲口（現 琉球ゴルフ倶楽部）にあった分教場（仲村一八さんの敷地にあった）で授業を受けることになった。そこには2、3ヵ月ほど通ったと思う。

百名では、大きめの農家だったわが家（新座波）にも2個分隊が駐屯した（のちに1個分隊になった）。現在百名の公民館がある敷地の隣には、当時は大城医院という民間の診療所があり、そこにも兵隊が駐屯していた。また、空き屋敷だった〈前大堂〉（茅葺きの空き家が2軒あった）が軍の炊事場となり、兵隊たちはそこに「飯上げ」と言って食事を受け取りに行っていた。食事を取りに来る兵隊は、3、4人で隊列を作り、軍歌を歌って歩いていた。私たち子どもはそれについて行っただけで、その軍歌を覚えるようになった。

疎開中止で漢那に行く

沖縄から県外への疎開が始まった時、私の父は区長をしていたが、区長の家族は最後に疎開するという事になってしまった。しかし、私たちが乗る予定だった船は出発直前で出航が中止になってしまった。だが、私たちの荷物は那覇の通堂から漢那（現 宜野座村）に運ばれることになった。私の家族6人はそこに行くようにと言われ、漢那に向かった。

漢那に向かう時、与那原から荷馬車に荷物を積み、安慶田（現 沖縄市）あたりまで歩いた。この学校で1泊し、翌日から2、3日ほどで漢那に着いたが、その途中の石川（現 うるま市）では空襲警報があり、小さなフクギの木の木陰に隠れた。漢那では、港ではない場所に仮の棧橋が造られていた。そこに2つの大きな帆のついた山原船（現地の人達は「糸満船」と呼んでいた）が入って来て、私たちの荷物が降ろされた。私たちは現地の民家や掘っ立て小屋（物置き小屋）に分宿して暮らすことになった。荷物は自分たちで掘った防空壕に収めた。我が家はその頃から分散が始まった。父とおじは防衛隊に入隊し、2人の姉（上の姉は大城幸一病院に勤めていた看護師見習いで、下の姉は玉城国民学校高等科卒業直後であった）は日本軍の協力員として動員され、家を離れた。家族6人と漢那に向かう時、この姉2人は与那原まで来て見送りをしてくれた。この2人の姉は戦死したそうだが、どこで死んだか未だにわからない。遺骨も見つかっていない。下の姉と一緒に行動していた人に話を聞くと、岩の下に隠れていた際、その岩に弾が直撃し、13人中この人以外は全員亡くなってしまったそうだ。戦後、その岩のところまで連れて行ってもらったが遺骨などは見つからなかった。戦後の遺骨収集で全て拾われてしまったのではないかと。

また、沖縄戦が始まる数週間前に思いがけないことがあった。玉城国民学校の私の担任の安里先生が家にひょこっと来られて、「もうすぐ中学受験が始まるので受験するように」と通知してくださったのだ。私はびっくりした。その時、私の両親は不在だったので返事のしようもなかった。そ

のことは心に残り続けていた。戦後、その先生を探したが戦死されたとのことだった。

百名に戻り沖縄戦が始まる

この頃、私の父とおじは防衛隊に召集されており、百名の家には病弱の70歳手前の祖母と、姉、赤子連れのおばが残っていた。私は漢那で2週間ほど過ごしたのち、(祖母たちの手伝いをするために)1人だけ百名に帰ることになった。百名に帰る時には、よく覚えていないが同じように玉城へ帰る数人の大人たちについて行った。夜中ずっと歩き通しで帰った。

昭和20年(1945)のお彼岸ひがんの頃、最初の艦砲射撃かんぼうしやげきがあり、住民は自分たちで準備していた壕ひなんに避難した。夕方にはアメリカ軍の艦船かんせんがいなくなっていたので、日本軍がアメリカ軍の艦船こうげきを攻撃して沈めたのだと勘違いしていた。

夕方に区民たちが集められ、兵隊から、アメリカ軍による艦砲射撃が始まったという説明を受けた。兵隊が言うには、百名の中でも特に診療所(大城医院)や製糖場せいとうじょうが海から目立つ場所にあるので狙ねらわれて、それらの後ろの田んぼたまに弾が数発落とされたということだった。兵隊は、その弾の破片はへんだということで、まだ熱のある大きな破片を見せていた。兵隊は、「これが飛んで来たらみんな死んでしまうから隠れなければいけない」と言った。なお、その時、兵隊への食料提供の要求もしていた。

親慶原おやげばるの壕に避難

私の父やおじたちは、防衛隊に召集される前、彼らの門中もんちゅうの人達と親慶原(現 南城市)にあった壕を整備していた。壕の中には大きな川が流れており、父たちは丸太棒で橋も造っていた。この壕は戦後に埋められ、今はもうない。艦砲射撃が始まった後、私は祖母とおばさんと一緒に、少しの米みと味噌みそを持ってこの壕に避難することにした。

ところが、私たちが壕に着くと入口に日本兵かまが構えていて、「この壕は軍が使っている」と言った。それで、壕の中を(自分たちが避難するために)整備していること、橋も架けてあることを説明すると、壕内に入ることを許可された。中は真っ暗だったので、入口側の明かりを頼りに生活することになった。

この壕にいた時、軍隊が使っていた馬のための草刈くさかりに行かされたことがある。また、わが家の男手おとこでは私だけだったので、夜には家に戻り、担かつげるだけの味噌や米を壕へ持ち帰った。大人の男性がいる家族は、どこからか芋や大根などの野菜をたくさん取って来ていたが、私は子どもだったので、自分たちの畑がどこにあるかわからず取ってくるができなかった。また、男性たちから「あそこで豚ぶたをつぶすから、後で取りに來い」と呼ばれたので行くと、つぶしていたのはわが家の馬だった、ということもあった。

崖の下のお墓に避難

親慶原の壕での生活は約10日か、それ以上続いたと思う。ある日「西原グラーまで敵(アメリカ軍)が来ている」と聞いたので、私たちは百名に向かって下りて行き、字玉城一区あざ(現 琉球ゴルフ倶楽部)

のカーバンタの崖下に着くと、その古いお墓を開け、遺骨^{いこつ}を片づけてそこに避難した。付近のあちこちの岩陰には、百名の人達が避難していた。そこには4、5週間ほどいたかもしれない。お墓の中にはシラミやノミもいたので、(それらを洗い落とすために)近くで水浴びしたのを覚えている。私は当時11歳でやんちゃだったので、加茶原^{カチャバル}のカー(井泉^{せいせん})の上の田芋^{たいも}が取れる場所で遊んだことがあるが、その際「アメリカ軍の偵察機^{ていさつき}に追われるよ！」と大人に怒られた。

玉城地域に駐屯した日本軍は、いつの間にか姿を消した。浦添^{うらそえ}や首里方面に移ったそうだ。百名区周辺に構えていた日本軍の陣地からは、数発発射されただけだった。その大砲や砲弾はそのまま残された。この地にいた防衛隊員や多くの民間人は、この陣地に残された弾薬等を浦添や首里あたりに運ぶため動員された。

負傷した父を迎えに行く

お墓に避難していた時に、防衛隊に召集されていた父が負傷^{ふしやう}したという知らせを受けた。父は山川橋(現 南風原町^{はえぼる})の近くで弾薬の運搬中に、自分の所有する荷馬車^{ばくだん}に爆弾^{ちよくげき}が直撃して両足を負傷してしまっただけで、父の反対側に座っていた、同じ百名出身の防衛隊員の仲村傳太さんもその時に両足を負傷した。仲村さんはそれが原因で亡くなったそうだ。父が負傷したことは、幸地^{こうち}(現西原町)にいた防衛隊員のおじに伝えられ、おじが私たちに知らせに来てくれた。ただ、おじは「自分は防衛隊から脱走した身なので、(父を)軍の病院から連れてくることができない」と言った。おじは、父がどこの病院に運ばれたのかも知らなかった。しかし防衛隊の人達が、「前川の馬場^{ウマイー}の反対側にある畑の中の壕に野戦病院の分室が移ってきているようだ。そこにいるかもしれない」と教えてくれた。そこで私とおじは、父を運ぶための木の棒と綱、カマス切れ²などを用意し、夜にそこへ向かった。

壕の付近に着き、私は「オトー、オトー」と呼びかけたが返事がない。しかしおじが「次郎、次郎」と呼ぶと「はい」と返事があった。辺りが真っ暗なので父がどこにいるかわからなかったが、しばらくして壕の入口にいた父を見つけることができた。その壕には、自分で移動することのできないたくさんの負傷兵がいた。日本軍がそこから南部へ撤退することになり、動けない兵隊たちはそこに置き去りにされたようだった。父は歩けないが頭ははっきりしていた。首には手りゅう弾^{しゅ}が7つほどかけられていた。後で聞いたところによると、壕から逃げようとする人がいたら殺すようにと言われていたという。私とおじは父を避難先のお墓に連れて帰った。父が持っていた手りゅう弾^{つか}は、みんなで分けて持つようにした。「どうせみんな死ぬから、アメリカ軍に捕まった時にはこれで死のうね」と言っていた。

その後、アメリカ軍が近づいているということで、さらに海岸近く(百名集落下の崖下)に移動した。そこにも古い墓があり、その中の遺骨等を片付けて、そこで暮らすことになった。アメリカ軍に捕まる4、5日前からは、夜間は墓の中で、昼中は近くのキビ畑や山の中で過ごしていた。

その隠れていたお墓の近くの山に、衛生兵^{えいせいへい}だった敗残兵^{はいざんへい}がいるということがわかり、父の手当て

²カマスとは、丈夫な植物の繊維で編んだ土のう袋のようなもの。その端切れのことを指していると考えられる。

のために来てもらった。おじは「逃げよう、敗残兵に殺される」とおびえていたが、「その兵隊も逃げているんだから大丈夫」と説得した。その敗残兵は、包帯や薬などの医療品を持っておらず、傷口のウジを取り除き、「布か何かあったらちょうだい」と言って、それで簡単な手当てをただけだったが、「(治るから)大丈夫」と話していた。実際に終戦後、父は足の傷口の中の破片を取り除き、歩けるようになった。父の他にも、敗残兵にけがの手当てをしてもらった人が何人かいた。

収容所になっていた百名集落へ行く

百名の集落付近がガヤガヤしてうるさく、車の音も聞こえることに気づいた父が、様子を見に集落へと上がっていった。父は歩行不能な状態のため、犬が這うように避難している墓から出て行った。すると、40～50メートルくらい行ったところで人の声に気づいたようだ。道で寝て、死んだふりをしていたら、通りがかりの人達が父が生きていることに気づき、病院へ連れて行こうとして父に声をかけた。父はそこで百名の状況を聞いたようだ。話によると、百名^{しゅうようじよ}は収容所になっており、あちこちからトラックで連れてこられた避難民たちが百名で降ろされているという。父はその人達に、捕虜になっても殺されないということを確認し、私たちを呼びに戻ってきた。ちょうどその頃、アメリカ軍も「この壕を爆破するから出て来なさい」と大音量で放送していたので、私たちは近くに隠れていた百名の人たちと話し合い、みんなで一緒に集落に上がっていった。この時、おじは手りゅう弾を「殺されないようだから持つな」と言って処分したようだが、どこに捨てたのかはわからない。

集落に上がっていき、私はそこで初めて^{こくじんへい}黒人兵を見た。そこで民間人と軍人・^{ぐんぞく}軍属³が分けられ、DDTをかけられた。はじめは白い粉をかけられたとしか思わず、これで殺されると思った。DDTがどんなものかは後から知った。おじは捕虜収容所（現在の百名小学校敷地内は、ほとんどが軍人・^{やか}軍属の収容所で、金網で囲まれていた）に入れられ、のちに屋嘉^{やか}収容所（現金武町）、その後ハワイに連れて行かれた。ハワイでの収容所生活の後、沖縄に引き揚げてきた。

^{みちばた}道端^{しゅうだんまいそうち}での生活と集団埋葬地

民間人だった私たちは「どこに行ってもいい」と言われた。集落内の大きな目立つ家は壊されていた。どちらかというとなさな、屋敷に木がいっぱいある家が残されていた。自分たちの家も残っていたが、すでにたくさんの避難民がいたので家に入れなかった。だが、戦前から空き家になっていた〈下門〉の、石造りのウワーフル（豚小屋）が空いていたので、そこで3日ほど過ごした。

私たちはその後、^{カニシマ}兼島の後ろの小道の道端で暮らすようになった。そこにも避難民がいっぱいいいて、自分の家に帰れない百名の人たちが何世帯もいた。初めは木陰に入って雨露をしのいでいたが、みんなで知恵を出し、あちこちから材料を集めて来て家を造った。

食べ物にはレーションの^{はいきゅう}配給があった。その中に入っているお菓子は子どもたちが取っていた。そのほか草木なども炊いて食べていた。困ったのは炊事をする場所がないことだった。自分の家に

³ 軍人・軍属はPW(Prisoner of War)、民間人はCIV(Civilian)と称された。アメリカ軍に投降し収容所に送られた日本兵や防衛隊員などの軍人・軍属には「PW」(Prisoner of War)と書かれた衣服が支給された。

入ることもできなかつたし、^{かま}窯も^{なべ}鍋もなかつたので、缶などを使って煮炊きしていた。私は行ったことがないが、集団での芋掘り作業も行われていた。^{ふなこし}船越(現 南城市)あたりまで行っていたようだ。

また当時、大きな弾薬のある壕があったが、子どもたちはその弾薬でいたずらをして遊んでいた。^{たま}弾の先を石でコンコンとたたいて先を抜き取り、中に入っている緑色の薄い火薬を取り出した。それをカマス(むしろ)に入れて持ち帰り、海で火薬に火をつけて魚をとった。今考えると、(弾から火薬を取り出すときに)よく爆発しなかつたなと思う。

私たちが住んでいたところのすぐ前は元々田んぼだった場所で、穴が掘りやすいので集団埋葬地としてそこに亡くなった人を埋めていた。若い男性たちは不在だったので、穴を掘っていたのは皆年配の男性達だった。^{いたい}遺体がどんどん運ばれてくるので、掘っても掘っても追いつかなかつた。1つの穴に遺体を重ねて入れ、そこがいっぱいになるとまた別のところに穴を掘っていた。私はそれを木の下に座って見ていた。穴に遺体をどんどん投げ捨てるように入れて行く様子を見て、これは人間のすることだとは思えなかつた。戦後、それらの遺骨は全て掘り起こされた。

用を足すときには、集団埋葬地のところに造られていた仮便所まで行っていた。壕などでの避難生活のためみんな病気がちだったので、^{げり}下痢などで便所にしょっちゅう行っていた。なお、夜間、便所に行くたびに、なぜかいつも点々と火が上がっていた。なぜだろうと思っていたけれど、火を防ぐ方法もわからなかつた。そのため便所では、いつもあわてふためいていた。後から人に聞いたら、その火は^{りん}燐じゃないかと言われた。

^{せいげん}制限されていた行動範囲

元の大城医院の辺りにはアメリカ軍の^{けんべいたい}憲兵隊の^はテントが2張りほどあつた。日本兵(敗残兵)の夜襲防止のため、テントの周囲には線を張っていた。夜間に敗残兵などが線に引かかると、^{しょうめい}照明弾が上がるようになっていた。実際に、その線に引かかって亡くなった敗残兵もいた。

夜間には民間人は外出禁止にされていた。用を足しに外に出たおじいさんがアメリカ兵に^う撃ち殺されてしまったこともあつた。この頃はまだまだ敗残兵がいたので、動くものはみんな銃で撃たれていた。このおじいさんは足が不自由で、片足を引きずって歩いていた。ここまで生き残つたのに、自分の家に帰る前に亡くなってしまった。また、この当時は百名全体が収容所になっていた。周囲を^{かなあみ}囲む^{みーぼる}金網はなかつたが、^{なかなだかり}新原や^{かきのはな}仲村渠、^{おやげぼる}垣花などの^{なかなだかり}近隣地域へ出ていくことも許されていなかった。垣花、^{おやげぼる}親慶原、^{なかなだかり}仲村渠二区(現 琉球ゴルフ倶楽部)は、すでにアメリカ軍施設になっていた。

百名収容所に開設された施設

焼け残つた^{ウフメー}〈大前〉の^{かわらぶ}瓦葺きの家には警察署が開設された。警察は、立ち入り禁止区域^{えつきょう}へ越境する人を取り締まっていた。当時、百名に在住する避難民は、およそ7500人余り⁴であつた。

7月には^{アサトツ}〈安里〉の、焼け残っていた大きな瓦葺きの家に子どもたちが集められて百名初等学校

⁴玉城村史編集委員会編『玉城村史 第6巻 戦時記録編』(玉城村役場 2004)320頁では、「終戦直後の百名区(仲村渠、新原を含む)の人口は、約六千人」だったと記載されているが、ここでは座波さんの語りをそのまま記載した。座波さんによると「何か見たか聞いたかでこの数字を覚えている。また、自宅周辺には200人ほどの避難民がいた。」とのことである(事務局による聞き取り 2023)。

での授業が始まった。百名には避難民の子どもたちが大勢いたが、食べ物がないので、道を行くアメリカ軍のトラックに手をあげ、アメリカ兵からお菓子を投げてもらっていた。そうやって子どもたちは朝も晩も道に立っていた。交通事故にあったら大変だ、せっかく生きのびたのにここで死んだら大変だということで、安全な場所に子ども達を集めたのが学校の始まりだった。

〈眞榮〉では民間人の濱松医師により診療が始められた。そこは、のちに知念地方中央病院になった。この頃にはマラリアが蔓延して大変だった。

〈前与那城〉の焼け残った家には、身寄りのない老人たちが収容されていた。建物は残っていたが床はなかった。老人たちは、そこで暮らすというよりは置かれているような感じだった。

戦争が終わってしばらく経ってからだが、〈神舎慶小〉(現 百名小学校の校門前)には劇場もでき、梅劇団などが芝居を上演していた。芸能で人々を慰めるという目的で始まった。

自分の家に帰る

集団埋葬地の前の道端で暮らし始めて数ヵ月後、テントの材料が手に入ったので、〈西座波〉、〈東座波〉の前あたりにあった畑の中に、掘っ立て小屋を造って暮らすようになった。テントの材料は、戦果をあげてきた人から買ったり、自分たちで戦果をあげに行ったりして親が手に入れていた。それから数ヵ月後、私たちは自分の家に帰ることができた。1年間に住む場所を3ヵ所ほど転々としていたことになる。

私たちが自宅に戻ってからも、自宅には自分の家に戻れない人たちが7世帯ほど残っていた。ほとんどが那覇の人達だったが、中城や読谷あたりの人もいたと思う。彼らとは2年ほど一緒に暮らしていたのではないか。また、周囲には摩文仁(現 糸満市)の人達もたくさんいて、夕方になるといつもお母さんたちが集まって泣いていた。なぜ泣いているのか訳を聞くと、「自分の子どもの口にタオルを押し込んで殺した」などの事情があったようで、夕方になると悲しくなって泣き出してしまうとのことだった。

自分の家に帰ってきた後、昭和21年(1946)、私は試験を受けて知念高校に入学した(百名には一時期、知念ハイスクールがあった)。この頃には少しずつ生活が落ち着き始めていたので、若い人は学業を勧められてみんな受験していた。入学式は学校の移転先の親慶原で行われた。校舎にはアメリカ軍の兵舎跡が利用されていた。

元の家に戻ってから、戦前のように本当に落ち着いて暮らし、農耕も始めるようになるまでには3、4年はかかったと思う。

(仲本和彦・事務局による聞き取り 2016

事務局による聞き取り 2023)

大分県へ学童疎開

私は玉城国民学校（現在の玉城小学校の前身）の高等科2年生の時に、学童疎開で大分県の中野村笠掛（現 佐伯市）に行った。疎開に行く時には、荷物は柳行李に入れて運んだ。この柳行李は、（引き揚げの時）持ち帰った。

笠掛には、昭和19年（1944）9月27日に到着した。直見駅（現在は無人駅。当時は駅員がいた）で下車し、坂や山を越え、川も渡って笠掛集落に行った。笠掛は山に囲まれた集落だった。

笠掛の人たちは、沖縄から来た私たちのために直見駅までわら草履を持ってきてくれていた。だが私たちがズックを履いているのを見て、わら草履をリヤカーに積んだまま、お寺（宿舎となった福圓寺）に持っていき、床下に入れた。しかしその後、ズックだけでは出入りが不便になり、この草履を使わせてもらうことになった。おかげで助かった。

お寺に着いた数日後、現地で同級生だった中村トクオさん（笠掛に一般疎開で来ていた金城悦子さん一家が間借りしていた主の息子）が自分の家からわらを持ってきて、疎开学童を集めてわら草履の作り方を教えてくれた。彼は同級生の中で一番面倒見が良かった。

笠掛に着いて初めの数日は、現地の婦人会の方々が銀飯（芋も麦も入っていない白米だけのご飯）を炊いてくれた。

笠掛での生活

私たちは、半ズボンをはいて沖縄を出発した。冬服を持参していなかったが、村の人たちが衣類を寄付してくれた。冬には学校の運動場で雪合戦をした。

笠掛では中野国民学校に通学することになった。沖縄では「標準語励行」と教育されていたため、私たちは標準語を使っていた。だが中野国民学校では、担任の先生が現地の方言で話していた。

戦争中だったので村には若い男性があまりいなかった。いたとしても体の弱い人だけだった。そのためか、祭りなども催されていなかった。また、安全な山間地ということで私たちは笠掛に連れていかれたと思うが、笠掛でも一度空襲で機関銃の射撃があった。

食べ物が不足していて、ひもじい思いをしていたので、出されたものは何でも食べた。学童たちは、麦を砕いてメリケン粉にするときに出てくるカスも食べていた。柿の実はいっぱいなかったので取って食べていたが、誤って渋柿を食べてしまったこともあった。

卒業後は農家の子守に

私は昭和20年（1945）の3月に国民学校高等科を卒業した。一緒に卒業した現地の同級生の中には、軍の航空隊の試験を受けた人もいた。

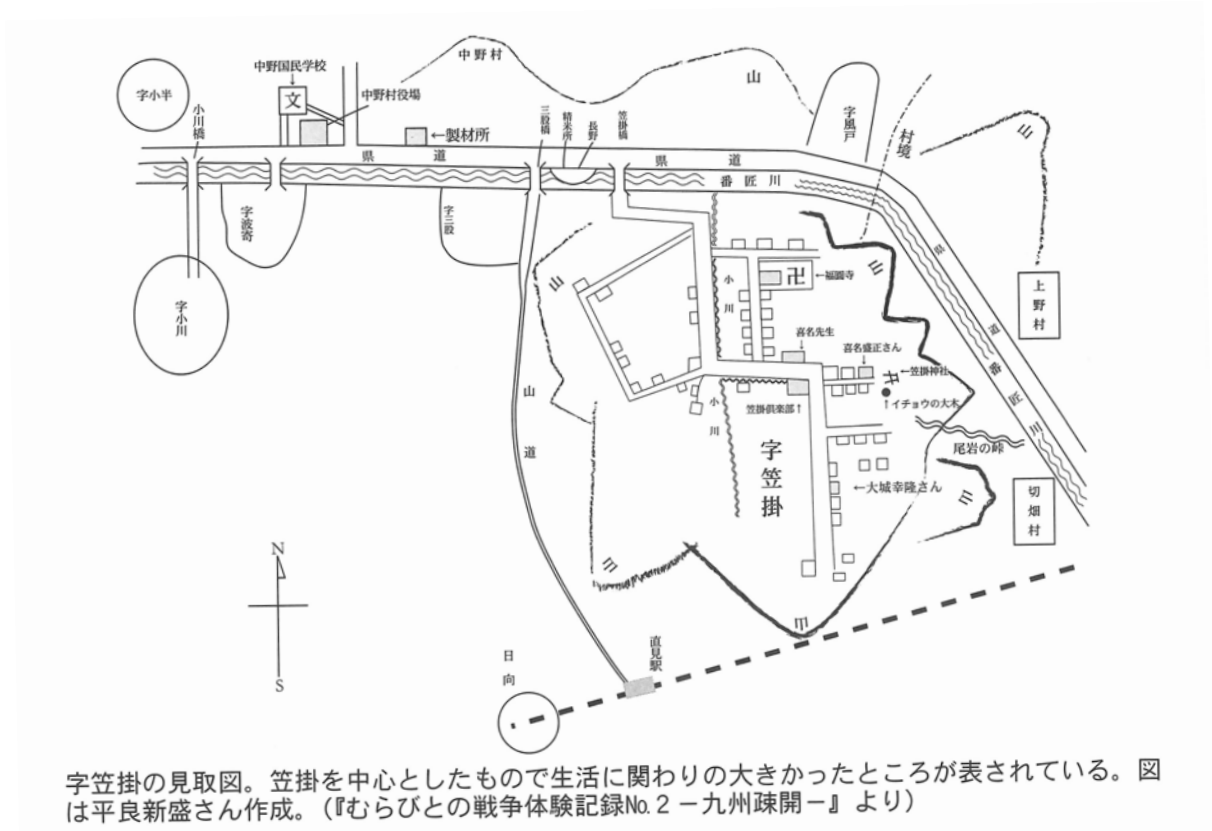
困ったのは、学童疎開で本土に来ていても、学校を卒業すると国からの配給や援助が受けられな

くなるということだった。自分でどこか行く場所を探して出ていかないといけなかった。引率の喜名先生は、食料がなくて養いきれないという理由で、卒業した学童を早くお寺から出すよう、福圓寺のお坊さんから厳しく言われていた。私は引き取ってくれる親戚もいなかったのでどうしようかなと思って過ごしていたが、喜名先生から「子守の話があるが行くか？」と声をかけてもらった。私は「話してください、助けてください」とお願いした。こうして笠掛の農家に住み込みで滞在できるようになった。私のほかに、同級生の稲福（旧姓東恩納）良子さんと稲福（旧姓當山）エミさんも、同じ笠掛の別の家で子守として住めるようになった。

住み込み先では、お寺にいた時よりも良いご飯を食べることができた。私の住み込み先のお婆さんは、気は荒いが優しい人で、日曜日には学校が休みの学童（上級生）を呼んできて農業の手伝いをさせ、報酬としてご飯を食べさせた。農家も男性が兵隊に取られて困っていたし、学童たちも農業の手伝いをするとご飯を食べられたので喜んでいた。

また、私は卒業後、玉城国民学校の^{かみの}大城徹男先生の班が疎開していた上野村の青年学校に何度か通った。青年学校は男子だけで、鉄砲の訓練などの教練を受けた。^{きやはん}脚絆などの道具は、住み込み先のお婆さんが弟さんのものを貸してくれた。

学童たちの宿舎は、のちに福圓寺から笠掛の倶楽部（集会所のような場所）に変わった。お寺と先生の仲が悪くなっていたので、それも事情としてあったのかもしれない。



『玉城村史 第6巻 戦時記録編』923頁より抜粋

沖縄への引揚げ^{ひきあげ}

沖縄に帰ることができたのは昭和 21 年（1946）の 10 月頃だったと思う。帰る前、住み込み先の家で田植えをしていた頃、刈り取りが 10 月なので、「自分で作ったのに、食べないうちに帰るな」と言われた。この頃にはその家のお父さんも復員して帰ってきていた。私は、彼と一緒に牛の草刈りや世話などいろいろなことをした。

沖縄に帰る前に 1 人あたり 1000 円が支給され¹、学童たちは別府まで行き、鍋や羽釜^{はがま}などいろいろな品物を買った。

引揚げは長崎県佐世保^{させぼ}の港からで、船に乗る前に数日間佐世保に滞在した。佐世保で車を降りたら、汽車のホーム（セメントでできていた）には満州方面からの引揚げ民がいっぱい寝ていた。兵隊も民間人もみんな混ざっているように見えた。頭を全部丸刈りにされた女性もいた。

沖縄に着き、久場崎（現 中城村）からトラックで玉城に帰ってきたが、その時は村の運動会をしている真っ最中だった。

戦後も続く疎開先との交流

私は戦後も何度か笠掛を訪れている。沖縄が本土復帰する前に行った時には、パスポートを作って渡航した。復帰後の昭和 48 年（1973）には元疎開学童の約 10 人で福圓寺を訪問し、現地で歓迎会を開いてもらった。

2017 年には、娘とその夫と一緒に笠掛に行き、住み込みをした農家のおばさんに会うこともできた。

（事務局による聞き取り 2018）

¹ 引率教員の喜名盛敏によると、疎開学童一人につき 1000 円が、沖縄帰還の準備金として日本政府より交付された。「沖縄に帰っても何も無い」と聞いていたため、喜名先生と子どもたちはさまざまな生活用品を買うために別府に行ったという（『玉城村史 第 6 巻 戦時記録編』931 頁）。

フィリピンへ移民した父

私の父は、僕が4歳だった昭和12年(1937)、家族を残して1人でフィリピンのダバオに移民した。その時は、数十人の男性たちが一緒になって行ったそうだ。

ダバオでは、主に日本に輸出するための麻栽培^{あさ}をしていたようだ。麻は当時、船をつなぐロープ作りのために重宝されていた。父はフィリピンで何千坪もの麻畑を耕し、日本へ輸出していたと聞いた。

ほうあんてん ちゅうこんひ 奉安殿と忠魂碑

たまぐすくこくみんがっこう
玉城国民学校(現在の玉城小学校の前身)の運動場の隣にある小高い丘の上には、奉安殿と忠魂碑があった。奉安殿は忠魂碑から約1メートル下がった所(階段のてっぺんに近いが平坦部ではない場所)にあり、中には教育勅語やその他の貴重品が入っていた。天長節¹や正月には、運動場で全校生徒が並び、校長先生はネクタイに燕尾服^{えんびふく}という当時では見たこともないような服を着て、「朕惟^{ちんおも}フニ我カ皇祖皇宗」と教育勅語を唱えた。唱え終わるまで生徒は頭を上げてはいけなかった。戦後、奉安殿には穴が開けられ、扉や中に入っていたものはなくなっていた。

戦前は、忠魂碑は全国で宝のように大事にされていた。玉城国民学校にあった忠魂碑は、忠魂碑のデザインコンクールで沖縄で1番、全国で2番になったと聞いたことがある。全国1になると賞金があったらしいが、2番だったのでもらえなかったそうだ。

忠魂碑のそばには、海で使用される爆弾である機雷^{きらい}も2つ設置されていた。機雷は、盗まれないようにコンクリートの台を作り、鎖でつながれていた。そのそばには大砲の弾も2つ設置されていた。

この2つの機雷は、日本軍が使う鉄がどんどん不足していったため、のちに軍に供出された。私たちの家にあったアルミの弁当箱もすべて供出され、代わりに竹製の弁当箱が支給された。

家族の中から1人で学童疎開^{がくどうそかい}

私は国民学校の初等科5年生だった昭和19年(1944)、家族の中から1人だけ、大分県へ学童疎開をした。学童疎開の対象は初等科3年生から高等科2年生までだったため、初等科1年生だった弟は行くことができなかった。沖縄戦中、弟は母と一緒に糸数アブチラガマに避難していたそうだ。

学童疎開は学校から希望者を募^つって行われたが、反対する親が大半だった。また、疎開を希望する子ども達みんなが疎開できたわけでもなかった。というのも、疎開地で生活していけるかどうか、事前に1人1人面接が行われたからだ。校長先生と吉元先生、日本軍の将校の3人を前に、1人ず

¹ 天皇の誕生日を祝った祝日。1948年(昭和23)に天皇誕生日と改称されるまで、この呼び方が用いられた。

つ座らされた。質問は「泳げるか」などだったが、元気ではきはき答えられるかを見ていたと思う。面接に合格しないと疎開はできなかった。将校が日本刀を持っていたので、それを見て泣いた子もいた。そういう子たちは疎開に行けなかった。

ある程度人数が集まると、那覇の港へ行って乗船するのを待つことになった。しかし那覇で待っている時に、疎開船が撃沈げきちんされたという話を聞いた。乗船予定の船も入港していないということで、いったんはみんなで歩いて玉城へ戻った。

疎開をやめた兄弟

それから約2週間後の9月の初め頃、再びみんなで那覇へ歩いて行ったが、たくさんの親が玉城から追いかけてきて、自分の子どもを「疎開に行かさない！」と引き留めようとした。だが荷物を先に船に積み込んでいたので、ほとんどの子が疎開に行った。

ある糸数出身の兄弟(弟は私の同級生で、兄は2歳上だった)も、同じ船に乗る予定で荷物も船に積んでいた。しかしかれらの長兄と母親が那覇までやってきて、「(疎開に)行かさない」と言った。彼らの父親は日本兵として南洋に取られていた。

疎開に行くことを止められた2人の兄弟は、沖縄戦の時に南部戦線で攻撃を受けて亡くなってしまった。私たちが疎開先から沖縄に帰ってくる時には、彼らの荷物も一緒に持って帰ってきて母親に渡した。荷物に入っていた砂糖や味噌などの食料は九州にいる時にみんなで食べてしまっていたが、服などはそのままにしていた。それを見た母親は、「うわあーっ」と泣き崩れていた。

きりはた 切畑きりはた国民学校に編入

学童疎開の私たちは、那覇港を出てから約2週間あまりの船旅を経て鹿児島に着いた。それから汽車に乗って大分県の上岡かみおか駅(現 佐伯市)に到着した。

玉城国民学校からの学童疎開は、第1陣と第2陣(私は第2陣だった)に分けて行われたが、両陣の学童は、4つの班に分かれており、それぞれ疎開先が異なっていた。切畑村(現 佐伯市)に行った私たちの班の引率者は吉元仙永先生で、先生の妻が寮母さんとして一緒に疎開生活をしていた。ほかにも2人の女性が炊事係として一緒に来ていた。洗濯ぬや縫い物などは、基本的に学童がみんな自分でやっていた。

切畑に着いてからは、昼間は暑くて問題なかったが、朝晩は冷えて大変困った。沖縄の子どもたちは半袖・半ズボンの服しか持っていなかったもので、村長さん達が子ども用の服を集めてくれた。自分の身丈に合うものを2、3枚ずつもらった。学童は布団1枚に2人ずつで寝ていた。

現地では切畑国民学校に編入した。地元の先生が大分方言で話すので、最初は何を言っているのかよく分からず、この先生は日本人なのかと思った。1クラス40人ほどの生徒がいたが(5、6人が沖縄出身の子だった)、沖縄の子の方が標準語が上手だったので、本読みはいつも沖縄の子が指名されていた。

てばたしんごう 手旗信号を覚える

学校に駐屯していた海軍の人々から、手旗信号を教わったことがある。土日は食料確保のため、疎開学童たちは地元の農家に手伝いに行っていたが、その際、手旗信号を使っていた。畑仕事などをしているとき、遠くにいる学童に「おーい」とかけ声をして、あとは手旗信号でやりとりしていた。「お昼は帰ってくるか?」「家で食べる。準備しておいて」といったやりとりなどをしていた。

手旗信号は、ひと月もかからず覚えたと思う。私たちは生活の中に手旗信号を取り入れていた。学校での会話で手旗信号を使うこともあった。地元の人も、「沖縄の人は兵隊と同じことをしている」とびっくりしていた。

ひもじい思い

学校から帰ると、「今日は芋掘り」「今日は薪拾い」など、日々仕事の割り当てがあった。男女6人ほどのグループで行動していたが、薪拾いの帰りなどには河川敷に座って、みんなで話をしていました。ある女の子は、「白いご飯を腹いっぱい食べられたら、いつ死んでもいい」と言っていた。みんなそんな気持ちだった。普段のご飯は麦や押麦が大半で、残りが白米だった。川で鮎を捕って食べたこともある。あまりの空腹に、農協の倉庫から生の米や大豆などを失敬して食べたこともあった。

イノシシを捕ることが当地ではよく行われていたが、肉は高く(沖縄から来た)私たちには買えなかった。でも中身(モツ)はそうではなかったので、スープなどにして食べていた。「沖縄人はモツを食べている」と悪い風に噂されたが、調理次第でおいしいことが知られると、地元の人も食べるようになった。

空襲と時限爆弾の処理

切畑(現在は佐伯市の一部だが、当時は切畑村としてあった)は空襲で直撃されることはなかったが、大分でも空襲を受けたところはあった。特に、切畑から近くにある佐伯市には海軍の基地があったので、空襲されていた。私は切畑から空襲の様子をよく見ていた。

また、近くに投下された時限爆弾の処理もよく見た。投下された爆弾はいつ爆発するかわからない。3日後かもしれないし、1週間後かもしれない。それをそのままにしておく危険なので、モッコで担いで番匠川の河川敷まで運んでいた。100メートル運んで、その場に置いて逃げるというのを繰り返していた。爆弾は数日後から1週間後に爆発していたが、人が巻き込まれたという事件はなかった。

日本軍の高射砲は、空高く飛ぶ米軍機に届かなかったのであまり意味をなしていなかった。だが終戦間近になると、米軍機も高度を下げて攻撃してきた。すると今度は、日本軍の飛燕(戦闘機)が佐伯の飛行場から飛び立ち、米軍機に体当たりするようになった。その様子も見ていた。

ぎよくわん 学校で聞いた玉音放送

終戦の玉音放送の時には、学校にみんな集められてラジオを聞いた。女性教員たちは「わあー」

と泣いていた。男性教員たちは兵隊帰りも多かったので、「ちくしょー！」と怒っていた。学校のグラウンドには兵隊もいたが、やけっぱちになったのか、兵隊同士でケンカを始めた。ああ、もう日本は終わりかなあと考えた。

終戦後、海軍の航空兵の乾パン^{かん}をもらいに行ったことがある。リヤカーいっぱい積んでもらったが、とてもおいしかった。

糸数出身の疎開者と再会

終戦後には学校を休んで、汽車に乗って大分市まで遊びに行ったこともある。小遣いがないので、目立たないように汽車に飛び乗って行った。

また、熊本の坊中^{ぼうちゆう}駅(現 阿蘇^{あそ}駅)で降りてバスに乗り、黒川温泉の方にも行った。そこには糸数出身の一般疎開者がいた。その人はエーキンチュ(金持ち)なので、私は荷物持ちをして一緒について回った。「この着物^{しょうぶつ}1枚と米5,6升を交換してくれませんか?」と、物々交換をして回っていた。

父と沖縄へ帰る

フィリピンにいた父は、戦争が激しくなると飛行場守備隊^{ちようへい}として徴兵された。その部隊は全部で350人ほどいて、そのうち50人くらいが沖縄出身の人だったようだ。ほとんどが麻^{あさ}の栽培で移民した人たちだったらしい。アメリカ軍の攻撃に遭うと、みんなジャングルの中に逃げ込んだそうだ。ウチナンチュは食べられる植物を知っているから、ジャングルの中で生き残った約30人はほとんどが沖縄の人だったそうだ。

父は昭和21年(1946)に京都の舞鶴^{まいづる}に引き揚げ^ひてきたようだが、持ち物は肌着と毛布1枚だけだった。他の荷物は乗船するときに没収されたらしい。

父は舞鶴から、私のいる大分県に会いに来た。別府温泉にパイプをつなぐ仕事があったようで、食事が提供されるということもあり、沖縄に引き揚げるまでそこで働いていた。昭和21年11月、私は父と一緒に沖縄に帰ってきた。

沖縄に帰ってきてまず驚いたのは、DDTを頭^{あたま}の先からたくさんかけられたことだ。指示を出すのはアメリカ人だったが、実際にかけるのは沖縄の人だった。

糸数に帰ると、集落の様子は(以前と)全然違っていたが、母と弟が元気でいたので安心した。

軍関係の仕事に就く

私は20歳の時に試験を受けて玉城村役場^{たまぎ}に入ったが、その前は天願^{てんがん}(現 うるま市)でアメリカ軍の警備員の仕事をしていた。給料は1ヵ月4000円ほどだったと思う。沖縄の墓地の前に貯蔵されていたアメリカ軍のガソリタンクを警備する仕事で、小銃も持たされていた。

ある日、警備員が刺殺されてドラム缶がすべて奪われるという事件が起きた。「たばこの火を貸してください」と言われ、(それに応じようとして)やられたようだ。

現在の中央パークアベニュー(沖縄市)のスーベニアショップ(お土産品店)で、嘉手納のアメリカ兵相手に働いたこともある。そこで英語も少し覚えた。陶器のティーカップセットは6000円く

らいで販売していたので、これを売ると大きな儲け^{もう}になった。

奉安殿と忠魂碑（平和之塔）の取り壊し

私が玉城村役場で建設課長だった時、玉城中学校の敷地拡張と新校舎の建設のため、玉城小学校に残っていた奉安殿と平和之塔（戦前の忠魂碑の「忠魂碑」という文字が消され、平和之塔として転用されていた）の台座であった大きな岩を撤去することになった。この岩の撤去には昭和42年（1967）11月から着工し、翌年2月に完了した。岩と一緒に、その上に建っていた奉安殿と平和之塔もダイナマイトで爆破した。学校側の判断で奉安殿の取り壊しを決めたが、議会では「残せ」という声もあり、大変な議論になったらしい。

ダイナマイトが使用された時、現在の琉球ゴルフ倶楽部の敷地にあった米軍基地（CSG部隊）から2人のアメリカ人（軍人ではなくシビリアンだった）が係として派遣された。ダイナマイトも箱詰め届けられた。爆破は、玉城村駐在の警官立ち合いのもとに行われた。私は建設会社での経験があり、役場の建設課長で現場担当でもあったため、ダイナマイトの取り扱いを担当した。爆破した後の岩のかけらは、米軍基地から借りてきた大きなブルドーザー（キャタピラー社のD8という型だった）で撤去した。

奉安殿の扉は鉄製だったが、当時は扉が朽ちて中が見える状態になっていた。また、平和之塔の上の三角部分は、「戦死者たちの魂があるから」と先輩たちに言われ、玉城村の戦没者名簿と一緒に村の慰霊之塔（1971年建立）の中に納めた。

（事務局による聞き取り 2015、2020

中村春菜による聞き取り 2016）

なかむらひでお
中村秀雄 (昭和4年生まれ)

〈義勇隊〉

こくみんがっこう 国民学校・青年学校

私は玉城尋常高等小学校（現在の玉城小学校の前身）に入学したが、在学中に、学校の名称が玉城国民学校に変わった。学校では忠魂碑や奉安殿の前で黙とうをさせられていた。「戦争で、僕らは弾に当たって死ぬまで（戦う）」、「日本は勝つ」と思っていた。

昭和19年（1944）3月に玉城国民学校高等科を卒業した後、私は青年学校に通った。青年学校では3日に一度授業があり、軍人勅諭などを教わっていた。

たけ 武部隊の軍犬の世話

昭和19年に武部隊（第9師団）が玉城（現南城市）にやってきてから、多くの人が村内の陣地構築にかり出されるようになった。

ある時、糸数アブチラガマの陣地造りに向かっていると兵隊に呼び止められ、軍犬の世話をするように命じられた。軍犬とは、30匹もの大きくてオオカミのような犬であった。噛まれるかもしれないし怖いので断ろうとしたが、「しっかりしつけられているから絶対噛まない。1ヵ月でも良いからここで働いてくれないか」と諭されたので引き受けることにした。私が履いていた地下足袋のにおいをすべての軍犬にかがせて私のことを覚えさせ、爪切りや餌やりなどの世話をした。

飛行場造りへの動員

青年学校1年生だったその頃には、軍の飛行場造りにも動員された。初めは西原飛行場の建設だったが、動員された者は、青年は私1人だけで他はおじさん達ばかりだった。おじさん達は、「中屋富祖（私の家の屋号）のあのワラビ（私のこと）はチムグルサニヤ（かわいそうだ）。こんな歳で動員されることはなかったのにね」と言っていた。また、おじさん達は、土が山盛りに積まれた畚（モッコ）を軽く運ぶために、急に引っ張って少し土をこぼすという方法を教えてくれた。

あるとき、1人の男性が作業中に手を止めて立っていると、馬に乗って巡回していた隊長が近づいてきて馬を降り、彼を叩いた。少しでも動きを止めると叩かれた。西原での飛行場造りは雨天が続く中で行われた。濡れながら畚や綱を担いで作業をした。

西原での飛行場造りは早い時期に打ち切られ、そのあとは小祿飛行場（一般の動員）、読谷飛行場、そして再び小祿飛行場（青年たちの動員）に行かされて作業をした。馬車を持つ人々は、馬車ごと動員されていて、私たちが馬車に積んだ土を運搬していた。今考えると、ショベルや馬車で飛行場を造っていたのはおかしいことだと思う。

食事は木の弁当箱に入れたものが支給された。弁当の中に、白飯の他に何が入っていたのか覚えていないが、弁当は飛行場の工事を引き受けていた國場組からの配給だったと思う。

はえばる 南風原村での壕掘り

飛行場造りの次は、津嘉山（現 南風原町）や喜屋武（現 南風原町）での壕掘りに動員された。喜屋武の民家の一番座に15日間泊まり、2週間ずつ作業をした。食事は芋ご飯の弁当であったが、これだけではお腹が満たされず、夜に豆腐屋で豆腐や芋を買って空腹をしのいでいた。

その後、現在の南風原文化センター（現 南風原町）のあたりにあった陸軍壕を構築する作業に行かされた。男性がショベルやつるはしで土を掘り、女性は掘られた土が入った畚（モッコ）を運んでいた。壕の中は暗いため、入口20～30メートル付近で兵隊が大きな鏡を置き、太陽の光を反射させて照らしていた。奥で通路が曲がる場所には光が入ってこないため、カーバイトランプのようなものを使って明るくしていた。

そこでの作業の後は、津嘉山集落の後ろの方で陣地構築をした。

ぎゅうたい 義勇隊への動員

沖縄戦が始まると、私たち家族は前川樋川のところに掘っていた民間防空壕に避難した。私の家の壕はヒージャーガー（樋川）の真上に掘られていた。兵隊の壕とは違い、民間の壕の内部は大人が立てる高さがなかったため、座って過ごしていた。壕には祖父母と母、私（長男）、弟3人（当時7歳くらいの四男、6歳くらいの五男、2歳くらいの六男）が避難していた。父は防衛隊として、姉（私の1つ年上）は独立混成第15連隊第3大隊第9中隊の救護班員として軍に取られていたため不在だった。次男と三男の弟たちは熊本県の日奈久に学童疎開をしていた。

壕にいた時に区長が壕にやってきて、「あんた方の息子はいるか？首里までみんなで弾薬を運びに行くだけだから集まってくれ」と声をかけた。軍から区長に、弾薬運搬のために人を集めるよう要請があったのかもしれない。壕の中で布団をかぶって隠れ、行かなかった人もいたようだ。

私は玉泉洞（現 南城市）近くの谷底に行くよう指示された。義勇隊としての動員であった。みんなが集合した後、「誰々は向こうに行きなさい」と振り分けられた。私は他の義勇隊員2人とともに、前川に駐屯していた独立混成第15連隊第3大隊第9中隊に配属されたが、第8中隊に配属された隊員もいた。

私たちは、前川、山川、津嘉山、一日橋（たくさんの人が死んでいた）、識名園、金城町の石畳を通り、安里八幡宮の後ろにある第9中隊の陣地（激戦地となったシュガーローフの近く）まで弾薬を背負って運んだ。

途中の識名園では、防衛隊に取られていた父が「弾にやられたが元気だ」という話を聞いた。父とは石畳のあたりで会うことができた。その後、父は安里八幡宮近くにあった部隊の病院に収容された。私は大丈夫かなと思いながら入院した父を見ていたが、その様子を見た軍医に叱られてしまった。

安里に着いてまもなくの頃は、まだ激戦にはなっていなかった。

義勇隊員への冷たい扱い

あるとき、1つしかない井戸で水を汲もうとしていたら、ある兵隊が、当時背の低かった私をは

ね飛ばした。私は持っていたバケツを投げて転んでしまった。すると沖縄出身の防衛隊員がその兵隊を捕まえ、「この子はまだ子どもなのに、転ばせてけがをさせるのか」と説教した。そして、私に水を汲んだバケツを持たせてくれた。

食事について言うと、隊長は飯盒はんごうのご飯（米）を食べることもあったが、義勇隊員は基本的に乾麵カンメン麵ボウ（乾パン）ばかり食べていた。私は、持参していた黒砂糖を乾麵麵カンメン麵ボウに混ぜて食べていた。炊事係の兵隊が良い人だと食事（米）をもらえることもあったが、通常はそうではなかった。優しくない兵隊だと、「僕らが義勇隊に仕事をさせているわけではないから、あんた方にあげのご飯は無い」と言われた。また、作業を終えて戻ってくる時に義勇隊の分が全て食べられてしまっていたこともあった。

前川で集められた、私の親世代の義勇隊員のなかには、青年たちを置いて前川に逃げ戻る者もいた。帰り道が分かっていたので、戻ることができた。しかし、青年たちは帰り道を知らなかったのので、帰りたくてもそうすることはできず、兵隊の使い走りになり続けるしかなかった。

安里まで弾薬を運んだ翌日の晩は、現在の沖縄県立南部医療センター・こども医療センター（現南風原町）のあたりにあった山の中の大きな墓で、第9中隊の兵隊や防衛隊員と一緒に過ごした。そこでは夜暗くなってから、兵隊たちは墓の中で薪たきぎを焚き、ご飯を炊いていたが、私たち義勇隊員は墓や兵隊の入っている壕の中に入れてもらえなかった。大きな墓の隣に子ども墓（小さい岩の下にあった）があった。その中には、小さな子どもの遺体が入ったそうめんの木箱が置かれていた。そのような墓の外でご飯を食べるのは嫌だったので、私たちはその遺体に手を合わせて、遺体をそうめんの木箱ごと茂みの中に持っていった。そして、私たちは空になった子ども墓の中に入った。

命がけの水汲み

その後、運玉森ウンタムイ（現在の西原町と与那原町の境にある山）に移動し、森の中に掘られた壕で過ごした。壕あかつきには暁部隊と書かれた弾薬箱が置かれていたので、暁部隊が弾薬をほったらかしてどこかに行ったのだと思う。

翌朝、私と同じように前川から義勇隊として徴用された同級生が、「水筒に水を入れて来い」と兵隊に指示された。彼は（私への相談もないまま）「秀雄（私）ができるから」と言って勝手に引き受けた。私と口論になったが、結局私が「戦争に勝つためだから、もう（誰かが）やらんといかんだろう」と言って、行くことになった。

私は25個以上の水筒の紐を首や肩にぶら下げて、井戸を探して1人で歩き回った。馬天港の方を見るとたくさんのグラマン（アメリカ軍の戦闘機）で空が真っ黒になっていた。

山の麓ふもとの方に行こうとすると、死体のあばら骨に足を突っ込んでしまった。とても臭いので、下のほうに下りて足袋たびを洗っていると、そこには腐った死体がたくさんあった。水汲みにきたところをやられたのだと思う。私がそこで水を汲んでいた最中も、空はグラマンが編隊を組んで何機も飛んでいた。壕あぶに戻ると、兵隊が携帯燃料で足袋を炙って乾かしてくれた。

その後、私たちは再び安里八幡宮へ戻った。防衛隊の人から、「部隊の位置が（アメリカ軍に）知られないようにするために移動することになった。これは隊長命令だから、移動するときに離れ

たらいけないよ」と聞いた¹。

激戦地で戦闘に参加

安里八幡宮に戻った翌朝からは激戦が始まった。ある兵隊に引っ張られて陣地に行かされ、すでに掘られていた2つのタコツボ壕の1つに兵隊、もう1つに私が入った。擲弾筒^{てきだんとう}の弾をたくさん担いでタコツボに入った私は、信管を抜いて兵隊に弾を投げ渡した。そして、兵隊はアメリカ軍の戦車や歩兵に向かって撃った。一日橋などで大勢の人が死んでいるのを見てきたので、いつかは（死ぬのだ）と覚悟はできていた。ここでは一方的な攻撃ではなく、両軍ともに攻撃し合っていたので夕方まで激戦が続いた。

夜になると戦闘が収まって静かになり、隊長から「後方に下がりなさい」と指示が出たので、私たちは撤退した。私は、救護班員だった姉と、富名腰二区^{ふなこしにく}（現 南城市）出身の1期上の男性と一緒に前川に帰ることにした。私は義勇隊員だったので帰ることを許されたが、防衛隊員だったならば許されなかったかもしれない。

前川に帰る

私たち3人は安里を出発した。現在のひめゆり通り（現那覇市）にあった汽車の鉄橋や、古波蔵^{こはぐら}、国場^{こくば}を通して帰った。国場にあった大きな橋はきれいに壊されていた。そこからは津嘉山、山川^{ほかま}、外間（現 八重瀬町）を通った。外間では、首里から避難してきていた家族連れと出会った。かれらは前川を目指していたので、私はかれらを連れていくことになった。道行く避難民の多くが前川を目指していた。

そして神里^{かみざと}（現 南風原町）では、負傷が理由で防衛隊から帰宅を命じられていた父と遭遇した。そこから湧稲国^{わきなくに}（現 南城市）を通り、前川の民間防空壕に帰って家族と合流した。この頃は非常に暑かったのを覚えている。

父の戦死

家族と再会したものの、母に「若い男性はアメリカ軍に射殺されるから、あんたたちは逃げた方が良い」と言われ、家族とはここで別れた。私はいとこの夫とその息子と一緒に、前川集落内を転々としながら避難した。前川集落西側の壕（穴川原近くの壕）に避難していた時、私たちは黒人兵に見つかった。外に出るとほかにも大勢のアメリカ兵がいた。私たちは手をあげて捕虜^{ほりよ}になった。

けがをしていた父は、親戚である中村医院の医師の治療を受けていた。医師は前川民間防空壕の中にある墓場でけが人の治療をしていた。

父は、その医師とともに南部へ避難した。だが、父と医師は途中で離ればなれになってしまった。医師は南部でトラックの下に隠れていた時に爆撃を受けて亡くなってしまったそうだ。

¹ 秀雄さんと一緒に第9中隊の義勇隊員として行動していた中村康雄さんの証言によると、彼らが運玉森方面に向かったのは、配属されていた第9中隊第2小隊の小隊長より、幸地（現 西原町）在の山部隊（第24師団）と合流して「米軍撃滅作戦に参加する」という命令が下ったためであった。しかしのちに、この作戦参加が誤報であることが分かったため、安里八幡宮方面（康雄さんは「上ノ屋陣地」と表現している）に引き返したとされている（玉城村史編集委員会編『玉城村史 第6巻 戦時記録編』玉城村役場 2004 859～860頁）。

父は他の防衛隊員2人とともに、30人もの兵隊をギーザバンタからやんばるまで、道案内をすることになったようである。前川の西側まで来ていたようだが、その後に亡くなってしまったという。亡くなった時の状況はよくわかっていない。

知念と船越での収容所生活

私は捕虜になり、アメリカ軍のジープで百名のワイトゥイ（岩の切り通しの道）まで連れていかれた。そこで家族が知念にいるという話を聞き、知念へ移動すると家族と再会できた。

家族は、知念の民家を借りてほかの捕虜と共同生活をしていた。姉は艦砲射撃で右足の太ももを撃たれたため、けがをしていた。ウジも湧いていたので塩水で洗っていたが、なかなか治らなかった。それで、治療のため百名の診療所に行かされたが、そこでは治療できないということで石川（現うるま市）の診療所に送られた。

知念では、みんなで親戚のおじさんが小川で捕った魚やウナギを食べたり、夜に浜辺でおじさんが弾く三線を聞いたりしていた。また、私がウナギの餌であるカエルを焼いたりもしていた。

知念で数ヶ月過ごした後、私たちは船越へ移動した。船越での生活はあまり長くなかった。アメリカ軍が前川の整理をし終えてから、私たちは前川に帰ることができた。

前川での戦後の暮らし

前川に入れるようになってからは、自分たちで家造った。その頃、東風平（現 八重瀬町）にはまだ弾薬が大量に保管されていたので、入ることができなかった。そのため、南洋帰りの東風平の人々も前川で仮住まいしていた。住居を確保することができない人のために、ファーフーヤーという家が建設されていた。家が不足していたので、1つの家の半分に東風平の人、もう半分に前川の人が住むということもあった。

わが家では戦争で父を失ったため、私は5人の弟たちを育てるために農業や大工仕事に励んだ。現在住んでいる家も、自分で建てた。

（事務局による聞き取り 2017、2023）

戦時下の生活

私の家族は父、母、私（長男）、弟（次男、2歳くらい下）、弟（三男、4歳くらい下）、妹（戦争当時6歳くらいだったと思う）で、父は農業をしていた。

私は玉城国民学校初等科（現在の玉城小学校の前身）の6年生で、学校では壕掘りにかり出されていたため、勉強はあまりできなかった。学童疎開の呼びかけはあったと思うが、私の家は貧しくて学童疎開の費用を出せなかったため、行けなかったと思う。

父は50歳を超えていたので防衛隊や義勇隊には取られなかったが、沖縄戦が始まる前、西原飛行場の建設に徴用されたことがある。飛行場造りに行っていた父に、弁当を2、3回持って行ったことがある。

富名腰二区（現南城市）では、家の近くの山に各世帯で防空壕を掘った。現在山は削られてしまい、その防空壕は残っていない。

伊原で母たちと妹が犠牲になる

アメリカ軍の上陸前後、家のあたりには艦砲射撃も空襲もそれほどなかった。私たちは家や防空壕にいた。アメリカ軍はのちにこのあたりのほとんどの家を焼いた。しかし、富名腰二区では、戦闘はとくに行われなかった。アメリカ軍はここを通過しかなかったらしい。移動せずここに留まった人もいた。ウージ（サトウキビ）畑に隠れ続けた後、捕虜になった家族もいる。

しかし、アメリカ軍が近く（大里のカトリック教会のあたり）まで迫ってきたと聞いた頃、父の先妻を加えた家族7人で南部に向けて避難した。私は親について行くだけだったため、どこを通ったのかははっきりと覚えていない。富名腰二区（現南城市）を出たのは昼間だった。攻撃を避けるため大きな道は通らず、主に山道を夜間に通って行った。富名腰二区、前川、後原（現八重瀬町）、新城（現八重瀬町）、大度（現糸満市）、伊原（現糸満市）あたりを通ったと思う。摩文仁（現糸満市）へは行っていない。海の近くも通っていた覚えがある。避難中に食事をした記憶はあまりないが、水を飲むための器を持っていたことと、サトウキビやイモを食べたことは覚えている。

伊原あたりで木の下に隠れていた時、家族で輪になって座っていたが、すぐ近くにカンボウの弾が落ちた。私は落ちたところを見た。その破片が父の先妻と、先妻に抱かれていた妹、母の3人に当たり、先妻と妹は即死した。妹は腹を切られ内臓が出てしまっていた。避難中に兵隊や住民などの亡くなった人をたくさん見ていたし、自分もいつやられるかわからなかったので涙も出なかった。無傷だった父と私、弟2人は「艦砲ヌキューヌクサー」だった。カンボウの破片はとても熱く、それを踏んで小さなけがをしたが、大きなけがはしなかった。

その後、伊原から富名腰二区に戻ることを決めた。父は母を背負って移動したが、まもなく母は息を引き取った。砲弾が落ちてできた穴に遺体を埋め、残った4人で富名腰二区を目指した。来た

道とは別の道を通ったと思うが、よく覚えていない。普通の道は通れなかったので、山道を歩いた。前川のワイトウイ（岩の切り通しの道）を通ったことは覚えている。

富名腰二区に着くと、一軒だけ焼け残った家があったので、そこに隠れることにした。しかし、一晚隠れた後、アメリカ兵を見て、手を挙げてそこから出て行き、捕虜になった。その時、富名腰二区のウージ畑（サトウキビ畑）にずっととどまりどこにも逃げなかった家族も、一緒に捕虜になった。

やんばるの^{かよう}嘉陽へ送られる

捕虜になって、垣花（現 南城市）^{かきのほな}の収容所まで行かされた。垣花の収容所は金網で囲われていなかった。テントの中に何世帯も一緒に入れられていた。父はそれを嫌がったのか、知人に頼んで家族4人だけで豚小屋（昔の豚小屋で石積みだった）に入れるようにした。私たちはグシチャー（すずき）を敷いて一、二晩はそこで過ごした。

垣花の収容所で1週間ほど過ごした後、GMC（アメリカ軍のトラック）に乗せられ、^{ぼてん}馬天（現南城市）あたりの港に連れて行かれた。そこからやんばるのどこかまで船で移動し、車で嘉陽（現名護市）まで運ばれた。船に乗せられた時には、やんばるへ連れて行かれるということは分かっていた。

嘉陽に着くと、10～20人が入れるテントが用意されていた。地面の上にテントを張っただけで床もなく、布団などの配給はなかった。夏だから寒くなかったと思う。のちに父たちが裏の山まで木材を切り出しに行ったり、竹を編んだりして仮小屋を建て、そこで富名腰二区から来た何世帯かと一緒に暮らすようになった。

嘉陽では食料が不足していた。畑にあったカンダバー（カズラ）を取ろうとしていたのを、地主に見つけて怒られたこともある。父が^{てなや}天仁屋（現名護市）までヒョーグワー（日雇い）に行き、もらってきた芋を食べて暮らしていた。

その頃、私はマラリアにかかった。決まった時間に必ず震えが来て熱が出た。完治するまでに長いことかかった。嘉陽ではマラリアや病気で亡くなる人がたくさんいて、同じ仮小屋に住んでいた女性も亡くなった。

母を失ったわが家では、私が炊事などの家事をするようになったため、私は学校に通えなかった。家事の合間に、近くにあった海で泳いで遊んだ。

^{ふなこし}船越収容所と戦後の暮らし

嘉陽で半年ほど過ごしたのち玉城（現南城市）へ帰れるようになったが、富名腰二区にはすぐに戻れず、船越収容所に約半年いた。船越収容所には木造長屋が造られており、一軒に4家族が入って暮らしていた。玉城に帰ってからも、私は家の手伝いのため学校には通わなかった。

伊原で亡くなった父の先妻と妹の遺骨は、収骨できなかった。戦後にその場所をアメリカ軍がブルドーザーで敷きならしたためである。母の遺骨は、穴に埋めたときに何か目印をつけていたのか、父が戦後に拾ってきた。

戦後、私は区の書記をして40代で酪農を始め、その後区長も務めた。

（事務局による聞き取り 2018）

まえはらしずこ
前原静子 (旧姓稲福 昭和7年生まれ)

〈村内避難〉

ヤードウイ 屋取の地で出生

私は長女として生まれた。私の父（恭善^{あざたまぐすく}）は字玉城、母（マツ）は字喜良原^{きらばる}出身。父方の稲福家は首里から屋取^{シミー}で字玉城に来た家だったので、清明の際には、家族は玉陵（琉球王国の王族の墓）^{タマウドン}に行っていた。

那覇に行くときには、大人も子どももここぞとばかりに着飾って行った。4、5歳の頃、南米へ移民に行く親戚を見送るため、父に連れられて那覇で1泊したことがある。玉城から大里の稲嶺^{いなみね}十字路まではバス、そこからケービン（軽便鉄道）に乗って那覇まで行った。当時のバスは木炭が燃料だったので、坂道ではしょっちゅう止まっていた。乗員が多い場合も、重くて止まった。止まった時は、よくみんなでバスの後ろを押して歩いた。那覇に着くと、みんな大事に抱えていた草履^{ぞうり}を履きだしていた。

那覇に行ったときに印象に残っているのは、泊まっていた旅館（同郷の玉城の人が切り盛りしていた）で初めてアイスコーヒーを飲んだことだ。また、しわにならないようにと着物を綺麗^{きれい}に畳^{たた}んでいたら、その女中さんたちに「アイエナー！ウツピグヌワラバーガアニリップガニチンタクロウサ（この子は立派に着物を畳んでいるよ）」とすっとんきょうな声で言われ、恥ずかしかったのを覚えている。

わが家は「稲福のウチフカ」という3家族の1つ。3家族とは、〈稲福〉^{せいか}（私の生家）、〈イリー稲福〉（父の実父の家）、〈メー稲福〉（親戚関係は不明だが、ターヌメーというおじいさんがいつも世話してくれた）。これら3家族は親しく親戚付き合いをしていた。戦争で逃げたときも、この3軒が一緒だった。

紀元 2600 年祭

天長節^{てんちょうせつ}³・紀元節^{きげんせつ}⁴の時には大々的に行事が執り行われた。その時、村民は、玉城国民学校（現在の玉城小学校の前身）のグラウンドに集まっている人々のスピーチを聞いた。昭和15年（1940）には起元2600年祭⁵という記念行事が行われた。学校のグラウンドで子どもたちが「2600」という大きな人文字を作り、それは遠くから写真に撮られた。

そんそう ちゅうこんび 村葬と忠魂碑

忠魂碑が学校のグラウンドの側に建っていたが、戦死した人のお骨は、その前でお迎えをした。

¹ 近世期以降、首里・那覇での生活に困窮した士族が地方へ居を移し、農業などで生活を立てるために開いた小村。また、その家のこと。

² 本稿では、屋号は〈〉で括弧で表記する。

³ 天皇の誕生日を祝った祝日。1948年（昭和23）に天皇誕生日と改称されるまで、この呼び方が用いられた。

⁴ 神武天皇が即位したとされる2月11日を祝った祝日。1966年（昭和41）から建国記念の日として国民の祝日となった。

⁵ 神武天皇の即位から2600年目にあたることとされた昭和15年には、日本全国でそれを祝う記念事業や行事が行われた。

私が国民学校4、5年生くらいの頃、隣家だった〈東恩納^{ヒジャンナ}〉の盛順兄さんが海軍兵として出征して亡くなった時、忠魂碑の前で村葬が行われた。盛順兄さんの奥さんは、喪服の着物を綺麗に着て参列していた。

盛順兄さんは私たちが小さい頃に沖縄を出ていたので、私は見たことも会ったこともなかったが、当時は「海軍に入る」ということに、なんだか^{ほま}誉れ高い思いを持っていた。

戦争協力の日々

戦前は自給自足が基本で、配給よりも軍への^{きょうしゅつ}供出のほうが多かったような印象を持っている。大人はとにかくよく供出の話をしていて。実際に供出をしているのは見たことがなかったが、米や芋などを供出していたようだ。ジーファー（かんざし）や^{くわ}鋏、^{かま}釜などの金属類は何でも供出し、ヒマシ油まで供出していた。

また、道ばたで女性たちが集まっていると、^{こくぼうふじんかい}国防婦人会（昭和17年に大日本婦人会に統合された）の人たちがそこへやって来て「千人針を縫ってください」と言っていた。国防婦人会の活動は、地域のまとめ役の女性たちが^{にな}担っていた。うちの母は子どもたちを育てるので大変だったから、そういう活動はしていなかったと思う。

^{となりぐみ}隣組⁶というものもあったが、今でもその歌を覚えている。「とんとん とんからりと 隣組 格子を開ければ 顔なじみ ^{まわ}廻して^{ちょうだい}頂戴 ^{かいらんばん}回覧板 知らせられたり 知らせたり♪」これは、隣組を通じて住民たちを^{いっさ}団結させて、みんなで戦に勝ち抜いていこうという意味をこめた歌だった。女性も子どもも、^{じゅうご}銃後⁷を固めるためにもてはやされていた。

^{きんろうほうし}勤労奉仕と日本兵

日本軍が村に駐屯するようになってから、玉城国民学校は日本軍の兵舎になった。そのため、^{なかなだかり}仲村渠二区^{イー ジグチ}の上江洲口（現在の琉球ゴルフ倶楽部）にいた^{イッパチ}一八というおじさんのところで授業をするから何月何日に行くように、と学校の先生に言われて2回くらい行ったが誰も来ておらず、それっきり学校の授業はなくなってしまった。

授業の代わりに勤労奉仕があった。私たち子どもは並んで、^{こうほ}壕掘りの時に出た土をパーキ（ざる）で運ぶ作業をさせられた。竹やり訓練もあったが、私は見るだけだった。

日本兵は^{いば}威張っていて、「おい、こら」が合言葉のような感じだった。日本兵と話しをした覚えはあまりないが、年頃の姉さんたちは日本兵に憧れを抱いていたようだった。

1つ、とても嫌な思い出がある。ある夜、私も含め2～3人が兵隊に呼び出され、とても重い爆弾を頭にのせて運ばされた。この兵隊は手ぶらでそばを歩いているだけだったので、この時には子どもながらも、^{はんこつ}県民を馬鹿にしているのかと反骨精神がものすごくメラメラと燃えた。でも何も言うことができなかった。このことは忘れられない。

沖縄戦が始まって、壕の中でみんなが食うや食わずのギリギリの生活をしている中でも、将校は

⁶ 内務省が発表した「部落会町内会等整備要領」により昭和15年（1940）に全国で制度化され、国民統制のために作られた地域組織のこと。

⁷ 戦場の後方。また、戦争の前線に対して後方支援活動を行うことや、間接的に何らかの形で戦争に参加している一般国民のことも指す。

綺麗に化粧をした「慰安婦」^{いあんふ}をつれて歩いていた。子どもの私でも、その光景にヌーヤガ（何だ）と違和感を覚えた。

疎開^{そかい}を反対される

玉城二区（現 南城市）からは十数人の子どもたちが大分県^{がくどうそかい}に学童疎開をした。残った学童は私を含め5、6人ほどだったと思う。友達みんなが疎開するので、自分も疎開したいという気持ちがあった。「イチュンディンドー（行きたい）」と母に話したら、「ウウン、ヤーヤイカサン（いいや、あなたは行かさない）。ユムシヌルアタヤラー、マジュンディシヌル（どうせ死ぬんだったら、一緒に死ぬ）」と言われた。母は私と妹を疎開させなかった。その時、父が八重山^{やえやま}の飛行場建設に動員されていたので、母は長女だった私を片腕として残したかったのだと思う。

十・十空襲^{じゅうじゅうくうしゅう}で父を失う

昭和19年(1944)10月10日、うちの近くのサーターヤー^{せいとうじょう}（製糖場。小高い丘になったところに建っていた）のところから、那覇の方が明るくなるのを見た。はじめは、日本軍が演習をやっているんだねえと思ったし、大人もみんなそう思っていた。しかし、あとからアメリカ軍の攻撃だったのだと分かった。

八重山の飛行場建設に行っていた父は、この十・十空襲で亡くなった⁸。一緒に行っていた1人が自力^{くめじま}で久米島に泳ぎ着いて生き残り、後からいろいろと話を聞いた。父の遺体はどこに行ったのかは分からない。

もともと、父は建設にかり出される予定ではなかったが、誰かの代わりに行かされたようだ。母は父を行かせた人（役場に勤めていた人）をととても憎んでいた。残された母は当時30代だったが、子ども6人や両親を守らないといけなかったのが大変だった。

戦争前夜の気持ち

戦争直前には学校や集落の大きい家が軍に取られた。子どもの頃の感覚だけれど、なんだかいつも暗い雲がヒタヒタヒタ…と押し寄せてくるという感じがしていた。ウージトーシ（サトウキビ刈り）の帰り道、なんとなくとっても「寂しい」という気持ちになった。この感覚は忘れない。

玉城への攻撃の始まり

十・十空襲からしばらく経った、お彼岸^{ひがん}の頃だったと覚えている。オバアたちが準備したせっかくのご馳走^{ちそう}が、いきなり落ちてきたアメリカ軍の爆弾で灰をかぶってしまい、ああもったいないと思った。

奥武島^{おうじま}（現 南城市）を取り囲むようにしてできた珊瑚礁^{さんごしょう}に、アメリカ軍の艦船^{かんせん}がびっしりと並んで艦砲射撃^{かんぱうしゃげき}を撃ってきた。その姿はとっても怖かった。「チューヤアミフイヤクトウ、クウシュ

⁸ 沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』（沖縄県教育委員会 2017）230頁によると、昭和19年10月10日、八重山からの帰りの徴用船が久米島沖で米軍機による攻撃を受け、約500人が犠牲になったという。

ウネーンハジ（今日は雨が降っているから空襲はないだろう）」と言って、みんな壕をぞろぞろ出て外で昼寝しようとしていたが、砲弾をパカナイパカナイ（どンドン）撃たれた。祖父は飛んできた破片を受けて、足から血を流していた。

この艦船に向かって日本の特攻隊が攻撃しようとしていたが、空中で墜落され花火のようになっていた。特攻機に乗っていたのは18、19歳くらいの青年たちだったのだろうが、可哀想に思う。

村内の壕を逃げ回る

玉城二区の住民に割り当てられた避難壕^{ひなんこう}はアガタンメーの壕（現在の琉球ゴルフ倶楽部内にある）だった。ウチフカ3軒はずっとそこで一緒に避難していた。壕内では、食事し寝るだけでなく、排泄^{はいせつ}も行っていたので、ひどい臭いがしていた。食べ物もまともになかった。長兄と母が夜に畑に行って芋を掘り、夜のうちに煮炊きをして、それで食いつないでいた。昼間に煮炊きをすると煙で居場所が知られてしまうため、食事は全部夜のうちに準備していた。

この壕に日本兵が来ることはなかった。この壕には、中城村^{なかくすくそん}から避難してきた新垣さんという女性と子どもたち（息子3人と娘1人）も一緒にいた。彼女たちとは、のちに収容所生活を送った下田の家でもずっと一緒にいた。戦後しばらくの間は「恩人」だと言って、よく稲福の家に来ていた。

1番長く避難していたのはこの壕だったが、いろいろと戦時情報を仕入れていたターヌメーのおじいさんが「アメリカ軍がどンドン攻めてきている。南下してくるから、ずっとここにいたら危ない」と言ったので、ワチバル（現 琉球ゴルフ倶楽部）に避難した。それから、落ち着くまであちこち何度も壕から壕へと避難した。ある日、ンメー（おばあちゃん）と子どもをどこかの壕に避難させたが、「ミジガココマデヒルガトード（水がここまで広がっているよ）」と言って、壕を出ることになった。それからまた別の壕に移動したのち、玉城城跡の中腹くらいにあった自然壕に避難した。

その頃はちょうど雨季だった。現在の玉城青少年の家の前あたりを歩いて移動していたとき、何十メートルも先から死臭がしてきた。でもそこを通らないと前進できなかったもので、死体を仕方なく踏みつけて歩いた。死体はピーラピーラ（腐っている）していた。私は裸足^{はだし}だったので感覚が直に伝わってきた。「ごめんなさい」と思う余裕もなく、「あい、いまどの辺^へ踏んだ」と思うだけだった。この感触は忘れない。

戦争が終わったと実感した日

ウチフカ3軒で壕の中に隠れていたある日、玉城城跡から外の様子をうかがっていると、人々がアリのようにゾロゾロゾロと列をなして道を歩いているのが見えた。「ソーティンジャーニ、アメリカヤ、ムルクルスガハジャー（連れて行って、アメリカ軍は皆殺すのだろうね）。可哀想に」と思っていた。そのようなことが数日間続いた。

そんなある日、長兄が志喜屋^{しきや}出身の同級生に会った。当時は食料も布団も全部壕に置いていたので、同級生はそれを探しに来ていた。彼は「アイエナー！イナフクハムルウランドー（稲福はみんないないよ）。ミンナシーワソードォ（みんな心配したよ）」と話していたらしい。また、「い

つまでもここにいると危ない、アメリカ兵（アメリカ兵）が爆弾落とすから、早くンジレー（壕を出なさい）。アングトゥ、ソーテンジャ、ミンナクルサンド（連れて行っても、みんな殺されないよ）。みんな普通に生活できるよ」とも言っていたという。それで、私たちは「ああ、殺されるんじゃないんだ。生きられるんだ」と言って、荷造りをして外に出た。壕の中で何ヵ月も陽の当たらない生活をしていたので、また、みんな、オージャマーしていた（青白くなっていた）ので、空がまぶしかった。

壕を出ると、山のはずれのところにある井戸に頭を突っ込んでいのようにして倒れている人を見た。頭を撃たれたのだろうか、頭部にウジが湧いていた。

また、途中でアメリカ兵と出くわした。言葉も通じなかったが、祖父が「兵隊さん、タスキティキミソーレー（助けてください）」と言って、助けを請う手真似をした。すると無表情で助けてくれた。初めて見るアメリカ兵だったし、今までは（アメリカ兵のことを）敵兵だと思っているし、人を見ては殺すだろうと思っていたので、怖くて顔を見ることもできなかった。私たちは6月23日以前に捕虜ほりよになっているが、日にちは覚えていない。

しもだ 下田で戦後の生活がスタート

「カチャバルひやくな（百名）から西の方はまだ戦争が終わっていないから行ってはいけない」と言われて、私たちは仲村渠なかなだかり（現 南城市）の下田に住まわされた。祖父の姉家族（「シチモー」と呼んでいた）が下田に住んでいたため、1、2年ほどは下田でお世話になった。母屋おもやは中南部からの避難民でいっぱいになっていたため、私たちは馬小屋に住んでいた。当時は「自分の家に勝手に帰ってはいけない」と言われていたので、帰宅できなかった。

シチモーには本当に多くの人（70～80人ほどいたと思う）が住んでいた。1つの家に4、5世帯の家族が住まわされていたのではないかと。家に入りきらず、兄は従弟いとこと一緒に軒下に寝ていた。

食べ物も不足し、カズラ（芋）の葉っぱさえなかった。飢えうをしのぐ程度の最低限の生活をしていたと思う。薪たきぎなどもなく、若い木も切り倒して乾燥させて使うほどだった。

壕の中に食料や布団など全部置いていたので、兄、母と一緒に壕まで荷物を取りに行ったことがある。ある時、壕の中で荷物を探していたら日本兵に出くわしたことがあった。飯盒はんごう（水筒すいとうにも見えた）があったので、それを取ろうとしたら「これは私のものだから取らないでください」といきなり声をかけられてびっくりした。一緒に来ていた兄に相談したら、「ここにいたらこの人はアメリカ兵に殺されるだろう。イリクルサリンドー（[鉄砲で] 撃ち殺されるよ）、ソーティーケー（連れて行け）」と言った。それで、この日本兵も一緒に連れて下田に帰った。2、3日はこの人も一緒に住んでいたが、顔もあまり合わせようとしないうし、話しもあまりしなかった。この人がのちにどうなったか分からないが、おそらく百名の収容所（軍人・軍属用の捕虜ほりよ収容所ようじょがあった）に連れていかれたのではないかと。

せっかく建てた瓦かわらの家だから

当時、避難民の人たちは、薪や新しく家を建てるための木材を手に入れるために、周辺の家をど

んどん切り崩していた。

祖父の恭信はその様子を見て耐えられなくなり、当時は自由に自宅へ帰ることが許されていなかったにもかかわらず、帰って、1人自分の家に住んで番をしていた。集落で初めての瓦屋根の家を自分で建てたので、思い入れがあったのだと思う。私たちは毎日、下田から浜川の道を通り、祖父に弁当を持って行っていた。

再就学へー知念高校入学

戦後おそらく2、3年してから、私はたった1日、2日ほどの受験勉強をして知念高校に入った。当時はノートも本もなく、何を勉強したのかも覚えていないが、受験して合格した。もちろん制服なんてなかったので、GI⁹の軍服を手縫い^{てぬ}してセーラー服を仕立てた。

当時の知念高校は親慶原^{おやげぼる}(現 南城市)にあった。私は6期生で、当時、屋良朝苗先生が校長先生だった。比嘉盛範先生が2年間担任をしていた。屋良先生はよく「アメリカの言いなりになってはいけない」と言っていた。

夏休みに、自分たちで机か腰掛けを作ったことがある。当時の知念高校は、物理や化学が秀^{ひい}でていたと思う。軍政府も近かったので、そこからいろいろと部品を取ってきて(いろんなものを)作っていたようだ。私も毛布でオーバーコートを縫って、学校の展示会に出品したことがある。生物の山城亀信先生、書道や公民の石川先生、漢文の湧上元雄先生にもお世話になった。

また、叔父の1人(母の弟)は戦前に満州^{まんしゅう}へ移民していたが、そこで妻子をロシア軍に殺されたらしい。戦後2、3年ほどしてから叔父さんだけが帰ってきたが、その際、私は今のユインチホテルの辺りに迎えに行った。叔父はその後、軍作業員として親慶原で働き、のちに愛知県に渡った。

(中村春菜による聞き取り 2016)

⁹ アメリカ兵を指す俗称。

証言に出てくる主な用語集（五十音順）

	用 語	よみかた	意 味
1	青空教室	あおぞらきょうしつ	戦争により校舎が消失した戦後、子ども達を対象に屋外で行われた授業のこと。青空学校とも呼ばれた。
2	慰安所	いあんじょ	戦地や日本軍の駐屯地域に設けられ、女性たちに兵士との性行為を強制した施設。
3	「慰安婦」	「いあんふ」	慰安所で働かされた女性たちのこと。
4	一般疎開	いっばんそかい	家族または個人単位で行われた疎開のこと。県外や台湾に住んでいた親戚を頼っていった「縁故疎開」と、頼れる縁故者がいない疎開者を沖縄県が調整して宮崎県・熊本県・大分県に割り振った「無縁故疎開」があった。
5	糸数アブチラガマ	いとかず	糸数集落東側に所在する全長約 270 メートルの自然洞穴で、沖縄戦中には軍の陣地壕、病院壕（沖縄陸軍病院糸数分室）、住民の避難壕として利用され、軍民混在の壕となった。1945 年 6 月には、アメリカ軍による攻撃を受けて避難民と重症患者に死傷者が出るが、その後も壕に残り続けた避難民と兵士たちが壕を出たのは 8 月中旬以降だった。壕内には井戸や遺物などが残っている。
6	インヌミ屋取	インヌミ やーどうい	県外や海外からの引揚げ者たちを受け入れた収容所で、現在の沖縄市高原にあった。ほかにインヌミ、またはインヌミ収容所などとも呼ばれていた。 →屋取（やーどうい）については、46「屋取（やーどうい）」の項目を参照。
7	沖縄県立首里高等女学校	おきなわけんりつしゅりこうとうじょがっこう	機織・裁縫・染色を中心とした教育を行っていた学校で、現在の那覇市首里桃原町にあった。1943 年の改称前の校名は「沖縄県立女子工芸学校」であった。沖縄戦で動員された生徒たちのことを、戦後「瑞泉学徒隊」と呼んでいる。
8	沖縄陸軍病院南風原壕	おきなわりくぐんびょういんはえばるごう	黄金森（現 南風原町喜屋武）と現在の南風原町役場近くの丘に掘られた人工壕で、約 30 の横穴壕が作られた。アメリカ軍の艦砲射撃が始まった 1945 年（昭和 20）3 月下旬から、本島南部への撤退命令が出された 5 月下旬まで沖縄陸軍病院の壕として使用された。壕に運ばれてきた負傷兵に対し、軍医、看護婦、衛生兵、女学生（ひめゆり学徒）らが医療活動を行った。
9	学童疎開	がくどうそかい	縁故疎開（一般疎開）ができない国民学校の児童を対象とし、主に学校単位で行われた疎開。
10	ガマ	ガマ	琉球石灰岩が浸食されてできた自然の洞窟のこと。沖縄戦では住民たちの避難場所になったほか、日本軍の陣地や野戦病院としても利用された。

11	カンポウ	————	沖縄戦体験者が沖縄戦体験を語る中で、空襲による爆撃や艦砲射撃などのアメリカ軍の攻撃全てを「カンポウ」と表現することがある。本書では、話者が「カンポウ」と話しているものの、その実態が艦砲射撃であると事務局がはっきり判断できなかった場合（実際には空襲だった可能性もある場合など）には、「艦砲」ではなく「カンポウ」と表記している。
12	艦砲射撃	かんぽうしゃげき	艦砲（艦艇に搭載された火砲の総称）による砲撃のこと。
13	艦砲ヌ キュー ヌクサー	かんぽう————	「艦砲の喰い残し」という意味で、沖縄戦でアメリカ軍の砲撃から生き残った人々が、自らを形容した言葉である。比嘉恒敏作詞作曲の新民謡の題名が初出である。
14	義勇隊	ぎゆうたい	アメリカ軍の上陸が間近に予想された昭和20年（1945）2月、翼賛会支部が主体となり、市町村ごとに市町村名を附した義勇隊と、その下部組織として町内会や字ごとの義勇隊が組織された。これは兵役法に基づくものではなかったが、沖縄戦では軍人でない一般の男女が半強制的に参加させられた。3月末にはアメリカ軍の攻撃が始まったため、ガマなどに避難している住民を直接動員する形もあった。義勇隊の主な任務は、アメリカ軍の上陸前は陣地構築などで、上陸後は戦場での弾薬・食料の運搬であったが、直接戦闘に参加させられた事例もあった。
15	玉音放送	ぎょくおんほうそ う	1945年8月15日に、昭和天皇が太平洋戦争の降伏を全国に伝えたラジオの録音放送のこと。
16	玉砕	ぎょくさい	玉のように美しく砕け散ること。また、全力で戦って名誉、忠義を守り潔く死ぬことを意味する。アジア・太平洋戦争中に日本軍の「全滅」を美化する言葉として用いられた。
17	斬り込み	きりこみ	敵陣を襲撃すること。刀を使用するとは限らず、手りゅう弾などの爆発物での攻撃も行われた。
18	久場崎	くばさき	1946年8月～12月に、県外・海外引揚げ者の受け入れを行う港として利用された、現在の中城村久場集落北側の海岸付近のこと。アメリカ軍はブラウンビーチとも呼んでいた。引揚げ者は久場崎に上陸するとDDTによるシラミ駆除を受け、久場崎港に隣接する久場崎収容所か沖縄市高原のインヌミ収容所に送られた。
19	軍属	ぐんぞく	軍隊に属し勤めていた軍人以外の人々。日本軍からの給与の有無に関わらず、民間人で軍に協力した人々はまとめてそう呼ばれることが多い。
20	軽便鉄道	ケービんてつどう	沖縄県営鉄道のこと、ケービンまたはケービンと呼ばれる。沖縄戦で破壊されるまで、陸上の貨客輸送の要だった。
21	高射砲	こうしゃほう	航空機を攻撃する火砲。
22	国民学校	こくみんがっこう	昭和16年（1941）、国民学校令によりそれまでの小学校が「国民学校」という名称に変わった。

23	在郷軍人	ざいごうぐんじん	現役として軍に属していない軍人のことで、予備役、後備役、退役軍人などを指す。在郷軍人で組織された団体を「帝国在郷軍人会」といい、沖縄県でも明治44年(1911)に連合分会として各地に設置された。
24	師範学校	しはんがっこう	明治初期から第2次世界大戦後の教育改革まであった教員養成機関のこと。沖縄には沖縄師範学校男子部と沖縄師範学校女子部があった。男子部は現在の沖縄県立芸術大学(那覇市首里当蔵)にあり、沖縄戦では生徒たちが「師範鉄血勳皇隊」として動員された。女子部は現在の那覇市安里にあり、沖縄県立第一高等女学校(一高女)と並置校だった。沖縄戦中に女子部と一高女から動員された生徒たちのことを、戦後「ひめゆり学徒隊」と呼んでいる。
25	十・十空襲	じゅうじゅうくうしゅう	昭和19年(1944)10月10日にアメリカ軍の艦載機が沖縄を襲った大規模な空襲。
26	収容所	しゅうようじょ	囚人、捕虜、難民などを収容する施設のこと。沖縄戦では民間人は民間人収容所、兵士は捕虜収容所に分けて収容された。民間人は焼け残った家屋やアメリカ軍が設置したテント小屋に収容されたが、なかには家畜小屋、木の下などで過ごさざるをえなかった人もいた。
27	手りゅう弾	しゅりゅうだん / てりゅうだん	手で投げる小型爆弾のこと。沖縄戦ではその爆風や破片で多くの人が命を落とした。安全装置を解除し信管を作動させた後、4秒前後で起爆した。
28	女子勤労挺身隊	じょしきんろうていしんたい	主に一般家庭の未婚女性で構成され、彼女たちを軍需工場などに動員した労働組織。沖縄県内に軍需産業がなかったため県外へ派遣された。挺身隊に選ばれると那覇市の開洋会館で2週間の訓練を受けた後、出発した。
29	陣地構築	じんちこうちく	野外に一時的な陣地を構築すること。
30	青年団	せいねんだん	明治30年代後半頃から日本国内で政府の指導により各地域で編成された組織。主に義務教育終了後の地方在住の若者が結婚するまでの期間在籍した。
31	戦果	せんか	本来は戦争や戦闘によって得られた成果を意味するが、戦後の生活について沖縄の人が「戦果(センカ)」と語るときは、アメリカ軍物資をかすめ盗る行為やその時の盗品を指す。
32	宣伝ビラ	せんでん	沖縄戦中にアメリカ軍の飛行機から撒かれた紙片のことで、日本軍や住民に投降を呼びかける内容が書かれていた。
33	武部隊	たけぶたい	第九師団とその隷下にある部隊を示す集団。1944年7月に沖縄へ配備されたが、12月に台湾へ移駐した。
34	忠魂碑	ちゅうこんひ	戦死者を尊崇するために建立された記念碑。
35	DDT	ディーディーティー	有機塩素系の殺虫剤の1つ。シラミ駆除などの目的で、住民を収容する際などにアメリカ軍が住民の頭に振りかけた。

36	擲弾筒	てきだんとう	手りゅう弾や小型の専用弾を発射できる小型軽量の迫撃砲のこと。
37	配給制	はいきゅうせい	米や味噌などの食料や衣類などの物資を人数や世帯単位で割り当てて配る制度のこと。日中戦争(1937～45年)からアジア・太平洋戦争(1941～45年)、および第2次世界大戦後の物資不足に対応するために実施された。
38	迫撃砲	はくげきほう	火砲のうち、簡易な構造をしており、射程が短く弾道が山なりのもの。砲身口径のわりに軽量で分解搬送が容易なものが多く、歩兵の装備としても扱われた。
39	引揚げ	ひきあげ	一般的には、終戦後、国外の日本の占領地や移民先などから人々が日本に帰ってきたことを指す。沖縄では、県外や台湾に疎開していた人々や、戦前に外国に移民していた人々が戦後に沖縄に帰ってくることを意味する。昭和19年から20年(1944～45)前半にかけては、本土疎開を「引揚」と称していた。
40	奉安殿	ほうあんでん	第2次世界大戦中まで、各学校で御真影(天皇・皇后の写真)や教育勅語(1890年に発布された、日本帝国の教育の基本理念を示した「教育に関する勅語」のこと)などを収めていた建物のこと。
41	防衛隊	ぼうえいたい	本書では主に、陸軍や海軍の防衛召集規則に基づいて召集され、日本軍の補助兵力として動員された、17歳から45歳の沖縄人男性を指す。なかには17歳未満や46歳以上の人も含まれていた。主な任務は弾薬運びや陣地構築などといった戦闘部隊の補助や飛行場造成であったが、沖縄戦では教練や武器の支給無しで戦闘に投入された例もあった。
42	防空壕	ぼうくうごう	空襲などの際に退避するために掘られた穴や構築物。沖縄ではガマ(自然洞穴)も防空壕として利用された。
43	方言札	ほうげんふだ	標準語励行のため、戦前から戦後まで沖縄各地の学校で用いられていた罰札。沖縄の方言を使うと次に使う人が現れるまで、「方言札」と書かれた板を首から下げなくてはならなかった。
44	捕虜	ほりょ	敵勢力に投降し、とらわれた戦闘員を指す。本来は民間人に対して使われることはないが、沖縄戦体験者(民間人)がアメリカ軍に投降し保護されたことを「捕虜になった」と表現することが多々ある。また、アメリカ軍に投降し収容所に送られた日本兵や防衛隊員などには「PW(Prisoner of War)」と書かれた衣服が支給された。
45	マラリア	————	熱帯・亜熱帯地域に分布し、蚊(ハマダラカ属)が媒介するマラリア原虫によって発症する伝染病。高熱、頭痛、嘔吐などの症状を引き起こし、死に至ることもある。沖縄戦中から戦後にかけて沖縄島や宮古・八重山で蔓延し、多くの犠牲者を出した。

46	屋取	やーどぅい	琉球王国時代、士族が首里・那覇から農村地域へ移り住む人口移動が行われた。当初それらの士族たちはいずれ首里・那覇に戻る予定であったが、時勢の流れにより、結局は移住先の地域に定着・同化するようになった。これらの士族たちが移動先の農村で形成した集落は、移動先の本村と区別して「屋取集落」「屋取」と呼ばれている。また、屋取集落はしばしば、「(本村の)屋取」と呼称される。
47	やんばる疎開	——— そかい	アメリカ軍による沖縄への大規模な空襲が始まった昭和20年(1945)3月23日以前に、役場等の指示に従って人々が集団でやんばる(沖縄本島北部)の割り当て地へ移動した経験のこと。なお、3月23日以降にやんばるへ避難したことを「やんばる疎開」と語る体験者も多い。
48	レーション	———	アメリカの軍隊で支給される食糧。レーション(Ration)とは配給品を意味する。第2次世界大戦時の主なものは、A、B、C、D、Kの5種類であった。

「沖縄戦体験の証言」（玉城地域）の原稿化作業を終えて

初めに、戦争体験を語って下さった旧玉城村の皆様と、原稿作成と掲載にあたってご協力いただいたすべての方々、そして南城市での勤務を終えた私に原稿作成の機会を与え、サポートして下さった南城市教育委員会の皆様に心からの感謝を表します。

話者の方々が「もう戦争を繰り返してほしくない」という思いのもと、つらく苦い記憶と向き合いながら語って下さった体験を原稿としてまとめていく一方で、いまの沖縄で自衛隊と米軍の軍備が着々と増強されていく現実や、2022年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻のニュースに、幾度となく無力感におそわれました。この文章を書いている2023年10月にもイスラエル・パレスチナ情勢が悪化し、いっそう不安と悲しみに心が負けそうになります。

それでも、話者の方々の言葉の一つ一つが、「現実には負けないで。二度と戦争を起こさないようがんばって」と私をふるい立たせています。二度と小学生に「白いご飯、腹いっぱい食べられたら、いつ死んでもいい」（知念信夫さんの戦争体験より）と言わせないように、16歳の若者に「死のうと覚悟を決め」（神谷依信さんの戦争体験より）させないように。12歳だった前原静子さんが、日本兵に対して反骨精神を「ものすごくメラメラと燃」やしたように、不条理に対する怒りや、一人一人の人生を破壊する戦争を拒否する気持ちを強く持ちつづけていきたいと思います。

これらの戦争体験が多くの人に読まれ、平和を希求する人々にとっての励ましや知恵となること、一人でも多くの人々の心に戦争を拒否する気持ちが芽生えていくことを願っています。

（山内優希 「沖縄戦体験の証言（玉城地域）」原稿作成者）

写真展

①「なんじょうデジタルアーカイブ」写真展

「なんじょうデジタルアーカイブ」では、南城市の歴史や文化にかんする1万3千点あまりの写真などを公開しています(2023年9月時点)。

日頃閲覧できない方のために写真を厳選し、写真展を開催しました。

展示写真のなかには、撮影された場所や時期などが不明なものもあり、展示とあわせて情報提供を呼びかけました。

- ・日時：2023年9月1日(金)～13日(水)9時～17時
- ・場所：南城市役所 3階 共有フロア
- ・対象：一般(市内外問わず)

②「笑顔が戻ってきた日」写真展

NPO法人 琉米歴史研究会と共催し、戦前から戦後の沖縄県各地の風景や人々の暮らしを撮影した写真展を開催しました。約200点の写真と、2本の映像を展示・放映しました。

- ・日時：2023年9月15日(金)～22日(金)9時～17時
- ・場所：南城市役所 3階 共有フロア
- ・対象：一般(市内外問わず)



写真展のチラシ



会場の様子



なんじょうデジタルアーカイブ HP

講演会

講師に赤嶺政信氏（琉球大学名誉教授）を迎え、「男はウミンチュ（海人）、女はカミンチュ（神人）-久高島の歴史と文化-」と題して開催しました。

赤嶺氏は長年にわたり久高島の調査・研究をしており、久高島の先行研究に出てくる男女それぞれの在り方をめぐる問題点などについて講演しました。

講演後の質疑応答では、「イザイホーで女性たちが発しているエーファイの意味」や「久高島の言葉が沖縄本島北部の言葉と似ている」ことについての質問があり、「記録がないため明確にはわからない」としながらも、講師自身の考えを交えて回答されていました。

講演会の様子は「なんじょうデジタルアーカイブ」にて公開しています。

- ・日時：2023年9月9日（土）14時～16時（13時半開場）※当日参加者67名
- ・場所：南城市役所 1階 大会議室・保健センター
- ・対象：一般（市内外問わず）
- ・講師：赤嶺政信氏（琉球大学名誉教授）
- ・内容：
 - （1）久高島との出会い
 - （2）イザイホーの祭祀概要
 - （3）先行研究の問題点と、講師の見解について
 - （4）ウミンチュとしての男とカミンチュとしての女の関係
 - （5）おわりに



講師の赤嶺政信氏



会場の様子



講演会の様子
（なんじょうデジタルアーカイブ）

民話劇

本事業は、令和3年度(2021)に刊行した『大里のちてーばなし』と過去に刊行した民話編の活用普及推進を目的に、民話を題材にした劇を創作し、市内の小学校で公演しました。

「ちてーばなし」とは、沖縄の方言で「伝え聞いた話」を意味し、「大里のちてーばなし」は昭和58年(1983)に旧大里村で実施した民話の聞き取り調査から得られた民話のうち、78話が収録されています。

今回の民話劇は、『大里のちてーばなし』のほか、公演する小学校の地域に合わせて、『たまぐすくの民話』、『沖縄・佐敷町の昔話』からも、それぞれ選出しました。出演者には南城市出身の方も参加しています。

なお、過去に開催した民話劇については、「なんじょうデジタルアーカイブ」にて公開しています。

①玉城小学校

- ・日時／場所：2023年11月22日(水)／同小学校 体育館
- ・対象：同小学校6年生、担任教員、その他関係者
- ・出演者：演撃戦隊ジャスプレッソ、Ryuty(リューティ)
- ・内容：
 - (1) 文化課職員による事前解説。文化課の紹介、民話の種類、上演する演劇の舞台になった場所の紹介やセリフに出てくる言葉の意味の説明。
 - (2) Ryutyによるライブ
 - (3) 演撃戦隊ジャスプレッソが『大里のちてーばなし』に収録されている「ハブの秘密」、『たまぐすくの民話』に収録されている「奥武観音堂由来」、「居眠次郎」の3作品を上演。
 - (4) 文化課職員より『大里のちてーばなし』刊行までの流れについて解説。

②馬天小学校

- ・日時／場所：2024年1月23日(火)／同小学校 体育館
- ・対象：同小学校5、6年生、担任教員、その他関係者
- ・出演者：TEAM SPOT JUMBLE(チーム スポット ジャンブル)、Ryuty
- ・内容：
 - (1) 文化課職員による事前解説。文化課の紹介、民話の種類、上演する演劇の舞台になった場所の紹介やセリフに出てくる言葉の意味の説明。
 - (2) Ryutyによるライブ
 - (3) TEAM SPOT JUMBLEが『大里のちてーばなし』に収録されている「石俵大主」、『沖縄・佐敷町の昔話』に収録されている「姥捨山(灰縄)」、「モーイ親方(薩摩難題)」の3作品を上演。
 - (4) 文化課職員より『大里のちてーばなし』刊行までの流れについて解説。

開催時の様子

(1) 文化課職員による事前解説



玉城小学校



馬天小学校

(2) Ryuty によるライブ



玉城小学校



馬天小学校

(3) 民話劇の上演



演撃戦隊ジャスプレッソ (玉城小学校)



左：奥武観音堂由来 右：居眠次郎



TEAM SPOT JUMBLE (馬天小学校) 左：モーイ親方 右：姥捨山



なんじょう歴史文化保存継承事業 年報

2024年(令和6)3月5日発行

編集・発行 南城市教育委員会文化課
〒901-1495 沖縄県南城市佐敷字新里1870番地
電話:098-917-5374
メール:bunka@city.nanjo.okinawa.jp

印刷・製本 沖縄自分史センター株式会社
〒903-0804 那覇市首里石嶺町4-288
電話:098-960-4104
FAX:098-960-4105

本書は沖縄振興特別推進交付金を受け編集、刊行された。